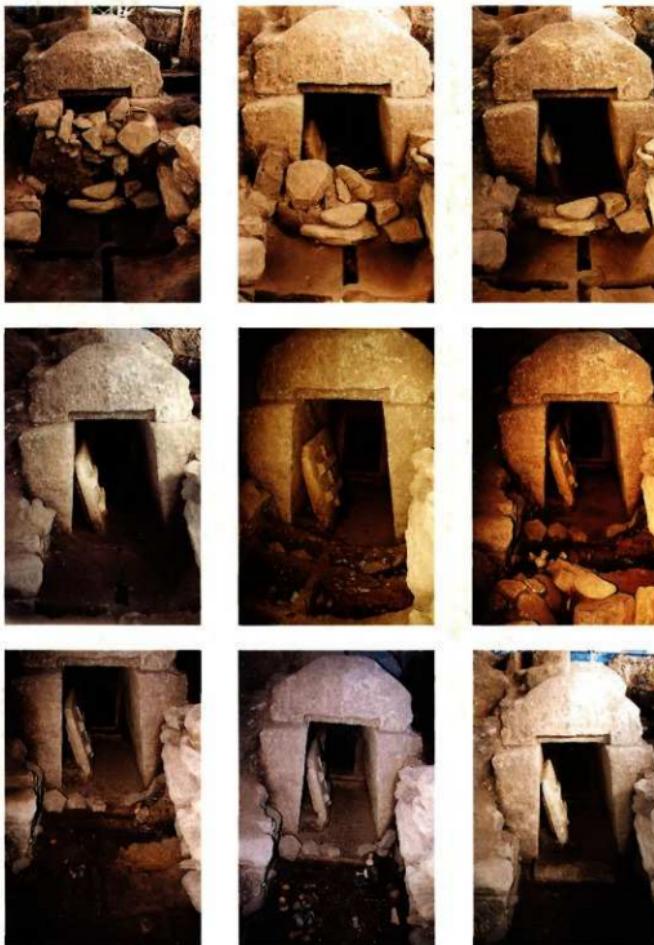


向山古墳群発掘調査報告書



1998年3月

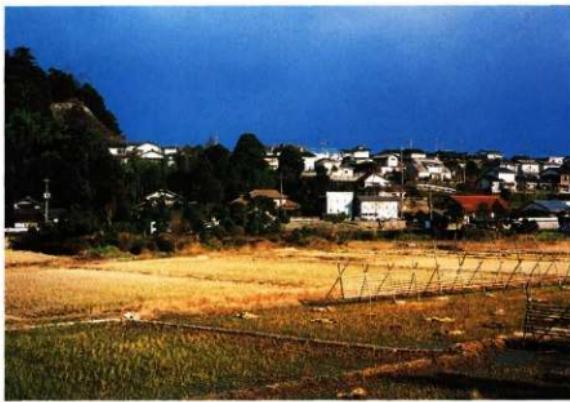
松江市教育委員会

松江市文化財調査報告書 第77集

向山古墳群発掘調査報告書

1998年3月

松江市教育委員会



向山古墳群遠景



向山1号墳子持壺出土状況



向山1号墳石棺式石室開口狀況



向山1号墳出土子持壺

例　　言

1. 本書は松江市教育委員会及び財団法人松江市教育文化振興事業団が国庫補助金を受けて平成6～9年度のうち3ヶ年にわたって実施し、平成6年度は個人住宅建築予定地に伴い、平成7年度以降は石棺式石室を持つ古墳の形態を解明するに伴う向山古墳群の発掘調査報告書である。

2. 調査の組織は下記のとおりである。

<平成6年度>

主　体　者	松江市教育委員会
事　務　局	諫訪秀富（教育長）、中西宏次（生涯学習部長）、中林　俊（同文化課長）、岡崎雄二郎（同文化財係長）、昌子寛光（同係主事）、落合昭久（同係嘱託員）
実　施　者	財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課　大塚雄史（理事長）、佐藤千代光（事務局長）、中尾秀信（調査係長）
調　査　者	金山正樹（調査係調査員）

<平成7年度>

主　体　者	松江市教育委員会
事　務　局	諫訪秀富（教育長）、伊藤博之（生涯学習部長）、中林　俊（同文化課長　平成7年6月まで）、柳原知朗（同文化課長　平成7年7月から）岡崎雄二郎（同文化財係長）
実　施　者	財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課　大塚雄史（理事長）、佐藤千代光（事務局長）、中尾秀信（調査係長）
調　査　者	瀬古謙子（調査係調査員）、門脇千恵（同係嘱託員）

<平成9年度>

実　施　者	松江市教育委員会
事　務　局	原　敏（教育長）、田中寿美夫（教育次長）、谷　正次（生涯学習課）、岡崎雄二郎（同課文化財室長）、中尾秀信（同室文化財係長）
調　査　者	成瀬和久（文化財係主任主事）、金山正樹（同係主事）、山根克彦（同係嘱託員） 和田卓也（同係嘱託員）

3. 調査の実施にあたっては、次の方々の協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

調査指導者　山本　清（島根大学名誉教授）、二浦　清（島根大学名誉教授）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、池田潤雄（島根県文化財保護審議会委員考古担当）、大谷晃二（島根県立八云立つ風上記の丘資料館学芸主事）、大塚初重（明治大学文学部教授）和田晴吾（立命館大学教授）、牛島　茂（奈良国立文化財研究所）、川原和人（島根県立埋蔵文化財調査センター第2係主幹）、広江耕史（同センター調査第3係文化財保護主事）、柳浦俊一（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）（順不同）

上地所有者 勝部武夫、吉野光徳、中島 茂、白石京二

調査参加者

<平成 6 年度>田中 芳 田中キクエ 永瀬速子 船木昭吉 船木京子 勝田 巍 勝田ムラ子
坂本美佐子 明事 忍 角田明弘

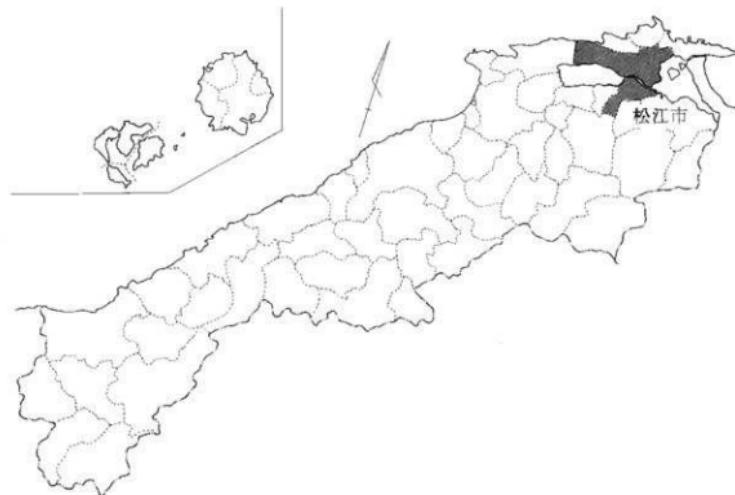
<平成 7 年度>中島 茂 水野千久子 荒川幸子 北垣澄子 川見美智子 高麗玉子 青木 博
柳浦正子 片倉愛美 藤永照隆 藤原 潤 安達和子 田中俊江 石川修
三島一男

<平成 9 年度>上野大輔 横松カズエ 梅原明枝 梅原 弘 大野隆 岡田義信 加藤恵治
川見美智子 北垣澄子 神門正 斎藤幸夫 土江直紀 中島 茂 水野登美枝
三谷美紀子 目次 勝 持田耕平

4. 採団中の方位は、磁北を指す。

5. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。

6. 本書の編集及び執筆、図面の浄書等は成瀬、山根、和田の協力を、遺物の写真撮影は右川（埋
蔵文化財課調査員）、曾田（同左）の協力を得て、金山が行った。



第 1 図 島根県地図

目 次

I. 調査に至る経緯	5
II. 位置と歴史的環境	6
III. 調査の概要	
向山1号墳について	
平成6年度調査	11
平成7年度調査	16
平成6年度出土上子持壺について	18
平成6年度出土遺物について	22
平成7年度盛土内出土上子持壺について	22
平成9年度調査	26
平成9年度出土遺物について	28
1号墳の石室について	31
石室の細部と石組	37
閉塞石	38
石棺	39
前庭～石室内の堆積土と遺物の出土状況	41
掻き出された遺物について	44
向山1号墳前庭部出土遺物について	49
向山2号墳について	
平成7年度調査	52
Bトレンチ出土上子持壺について	54
平成9年度調査	55
平成9年度出土遺物について	58
その他の調査	61
IV. 小 結	62



向山1号墳石室（南側より）

I. 調査に至る経緯

本古墳群は松江市街地南東、古志原町地内の丘陵南向斜面中腹に存在する。本古墳群が発見されたのは昭和45年に当時の土地所有者が宅地造成を行った際、石棺の天井石らしきものが発見されたことに始まる。この時工事は中止され、向山1号墳として発見届が提出された。更にその後の分布調査によって隣接地に新たに方墳1基と前方後方墳推定地が1基確認され、合計3基の「向山古墳群」として松江市遺跡地図に記載された。

その後平成5年度において、当地に個人住宅を新築する計画が起り、遺跡分布調査依頼書が提出された際に現地を踏査したが、予定地は以前の造成工事によって一様に削平されており、古墳の墳丘はわずかに南側に残るのみで1号墳の墳丘範囲が把握できず、また以前発見された石棺天井石の位置も不明であったことから、平成6、7年度において1号墳の性格と墳丘規模、及び2基の古墳推定地について古墳の有無を確認する調査を実施した。その結果、向山1号墳は山陰地方独自の埋葬施設である石棺式石室をもち、二段築成の大型方墳と推測された。2基の古墳推定地については1基は中世後期以降に作られた遺構で、残りの1基については1号墳と似た盛土の形態をもつことから1号墳と似た古墳が存在すると考えられ向山2号墳と命名された。

平成9年度において1号墳は北東、北西隅を調査して墳丘範囲を確定し、2号墳は墳丘規模、構造、内部主体の有無を確認することを目的として調査を実施した。



第2図 向山古墳群位置図 (1:100,000)

II. 位置と歴史的環境

向山古墳群は、松江市街地の南東方向、古志原町の周囲が住宅地となっている雑種地に所在する。標高は約20mである。周囲には古代出雲を垣間見るために必要な遺跡が多く存在する。本古墳群から見て南東方向には、「出雲国風土記」にいう意宇の神名施野、中世以降に茶臼山と呼ばれる山がそびえ、更にその南東には意宇平野の水田地帯が広がっており、有数の穀倉地帯として古くから繁栄した地であった。

周辺の縄文時代の遺跡としては、縄文式土器片・石斧が出土している才塚遺跡、保地遺跡などが知られている。

弥生時代前期の遺跡としては平野部に中竹矢遺跡、布田遺跡が、後期の遺跡としては、墳頂に7基の墓壇をもつ米美埴墓や墳頂墓壇上に土器片、墳裾に大型壺が出上した間内越1号墳のような方形墳丘の四隅の裾が対角線方向に突出し、斜面に貼石を施し、墳裾に沿って立石列、敷石帶などを巡らす四隅突出型墳丘墓が存在する。

古墳時代には、出雲を代表する古墳が多く造られる。茶臼山西北の馬橋川水系には方墳で斜面に葺石を施す二段築成の大庭鶴塚古墳や西日本最大級の前方後方墳である山代二子塚古墳、向山1号墳と同様に石棺式石室をもつ山代方墳や永久宅後古墳、孤谷横穴群、十王免横穴群、東淵寺古墳等が存在する。南方丘陵上には、「額田部臣」の銘文入円頭大刀が出土した岡田山1号墳をはじめとして、岡田山2号墳、団原古墳、岩屋後古墳、御崎山古墳等が分布している。意宇平野の南側丘陵には、古天神古墳、東古塚山古墳群、西百塚古墳群、後谷古墳群といった群集墳も造られ、石棺式石室の形態を模倣した安部谷横穴群などが分布している。北側丘陵には廻田古墳などが知られている。

奈良時代に入ると意宇平野に国庁が設置され、周辺地域が政治、文化の重要な地として位置付けられていたことが窺われる。「出雲国風土記」によれば、出雲国庁の他に意宇群家、意宇軍団、駅、山代郷正倉などが設置されていたことがわかる。平野北部の丘陵地では出雲国分寺跡、出雲国分尼寺が知られている。また、山代郷内にあった2ヶ所の新造院について「師(四)上寺」という地名のあることから古代寺院跡として早くから存在が知られていた四王寺跡と共にそのうちの1ヶ所といわれている来美庵寺が茶臼山北麓に存在する。

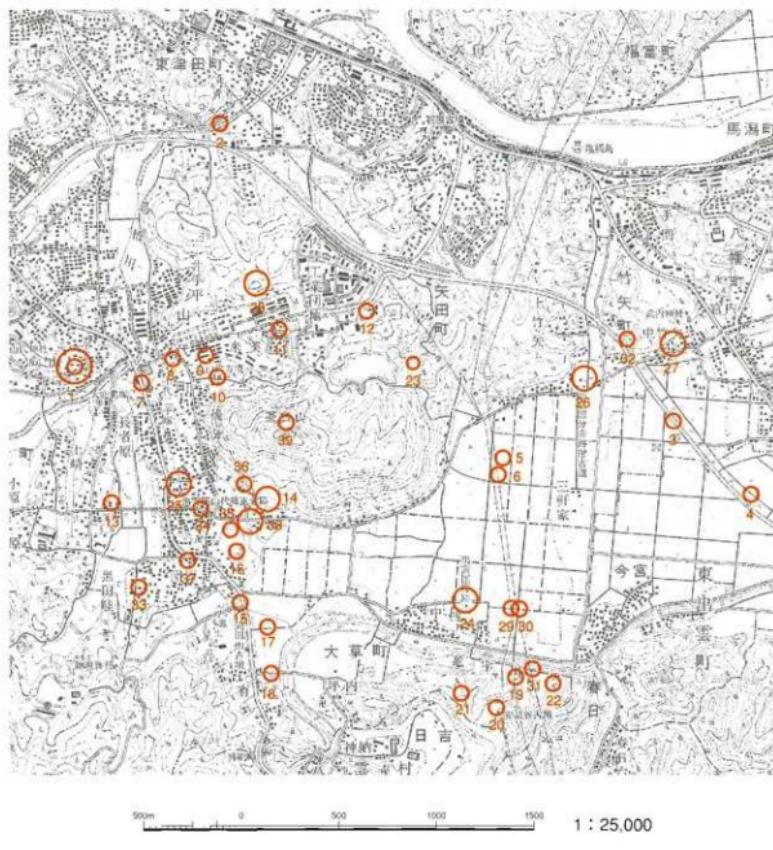
中世の遺跡は意宇平野の南辺に大尾敷遺跡、才塚谷遺跡、天溝谷古墳、北辺に中竹矢遺跡、西端に出雲国造館跡などがある。茶臼山の西南北麓には、黒出館跡、小無田遺跡、市場遺跡などが分布し、黒田塙遺跡からは中世～戦国末期頃の建物や柵列の他、土壙墓から多量の無文銭が出土している。また、本調査区と隣接している寺の前遺跡では12世紀頃の貿易陶磁器が出土している。茶臼山山頂には城跡がある。

<参考文献>

島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』1994年

—島根県松江市山代町所在・山代郷南新造院(四王寺跡)—

松江市教育委員会『向山1号墳発掘調査報告書』1995年



1. 向山古墳群 2. 石台遺跡 3. 布田遺跡 4. 夫敷遺跡 5. 上小紋遺跡 6. 向小紋遺跡 7. 大庭鶴塚古墳
 8. 山代二子塚古墳 9. 山代方墳 10. 永久宅後古墳 11. 猿谷横穴群 12. 十王免横穴群 13. 東洞寺古墳
 14. 四王寺跡 15. 岡田山1号墳 16. 団原古墳 17. 岩屋後古墳 18. 御崎山古墳 19. 古天神古墳
 20. 東百塚古墳群 21. 西百塚古墳群 22. 安部谷横穴群 23. 週田遺跡 24. 出雲國御跡 25. 山代郷正食跡
 26. 出雲國分寺跡 27. 出雲國分尼寺跡 28. 来美魔寺跡 29. 大屋敷遺跡
 30. 才垣谷古墳 31. 天満谷古墳 32. 中竹矢遺跡 33. 出雲國造銘跡 34. 黒田跡 35. 小無田遺跡
 36. 市場遺跡 37. 黒田畦遺跡 38. 寺の前遺跡 39. 茶臼山城跡

第3図 周辺の主要遺跡

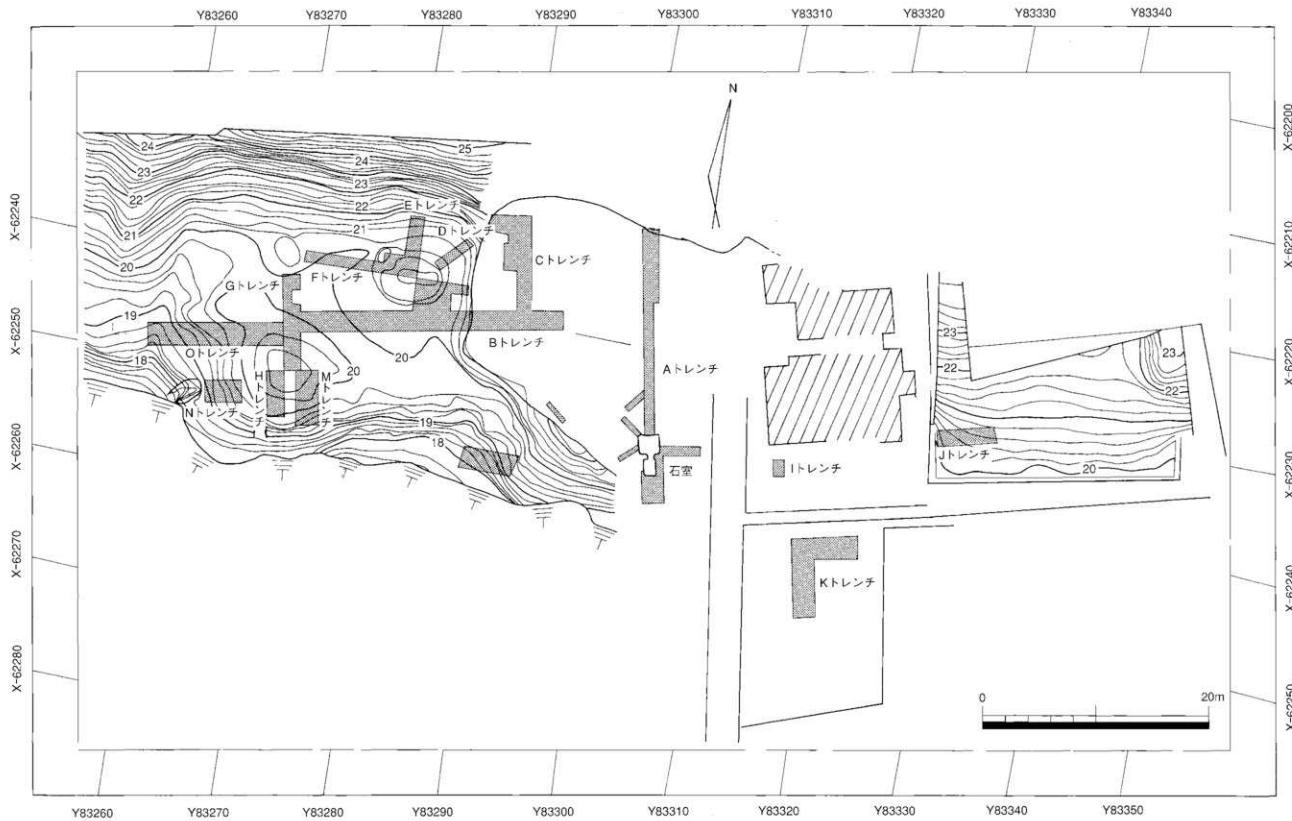
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団

「出雲国分寺跡発掘調査報告書」1995年

「寺の前遺跡発掘調査報告書」1995年

「黒田畦遺跡発掘調査報告書」1995年

「四王寺跡発掘調査報告書」1996年



第4図 向山古墳群平面図

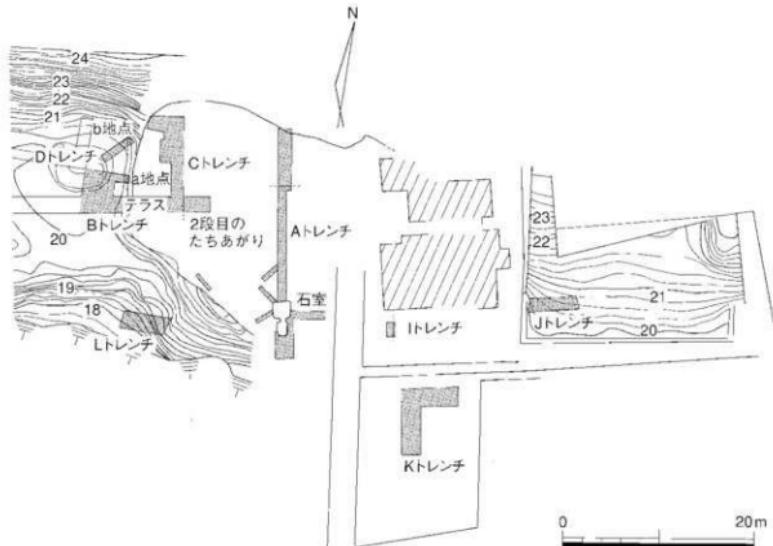
III. 調査の概要

◆向山1号墳について

平成6年度調査

1号墳の大半は重機によって削平を受けており、古墳築造当時の形状を留めておらず墳形・規模とともに不明であったが、調査以前に石棺の天井石と確認された箇所を中心にトレンチを設定して調査を実施したところ、出雲地方独特の埋葬施設である石棺式石室が確認された。更に石棺式石室を中心にして、東西南北にトレンチを設定して調査したところ、残存している盛土から黄褐色粘質土(地山によく似た土色・土質)と黒色粘質土を交互に積んだ版築状の非常に丁寧な埴丘構造が見受けられる。東・西・北側各トレンチの表土下約1.9mより人頭大の石がそれぞれ数個組み合わさった形で検出された。主体部北側の盛土には礫が混入しており、盛土の流出を防ぐ役割を果たしているものと考えられる。漢道部東側暗褐色粘質土中より子持壺2個が出土しており、漢道入口部から南側にかけて盛土の構築状況がやや雑になるよう思われる。本墳墳頂西側と思われる箇所表土下約20cmの暗褐色粘質土中より須恵器、表土下約70cmの茶褐色粘質土中より土師器がそれぞれ細片で出土しており、表土下約85~120cmにおいて地山に達する。

主体部は玄室・漢道部がほぼ完全な形で確認された石棺式石室であった。主軸をほぼ南北にとつて南側に入口を設けている。各壁、天井石とともに一枚の切石から構成されており、南北(奥行)約

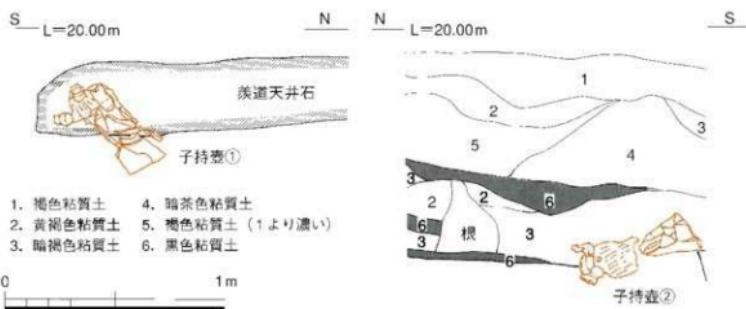


第5図 向山1号墳トレンチ配置図

2.3m、東西（幅）約2.2mを測り、凝灰岩を使用しているものと思われる。天井石の厚さは約0.9mで、築造当初は屋根型に整形加工されていたと思われるが、重機によって天井石頂部が若干削平されている。側壁は西側で長さ約1.8mと確認され、やや内傾している。天井石の間には粘土で目張りが施されている。また、羨道部は南北（奥行）約1.5m、天井石の厚さは約0.5mを測り、玄室と同様に屋根型に整形加工がなされている。羨道部羨門は多数の蝶を詰めて閉塞してあった。羨道南側より疊及び最大長さ約90cm、幅約60cmの山石が数個積み上げられた形で確認され、ここを覆う黒色粘質土より土師器・須恵器が出土しており、祭祀儀礼の供獻土器と考えれば前庭状の施設があったものと窺われる。



作業風景



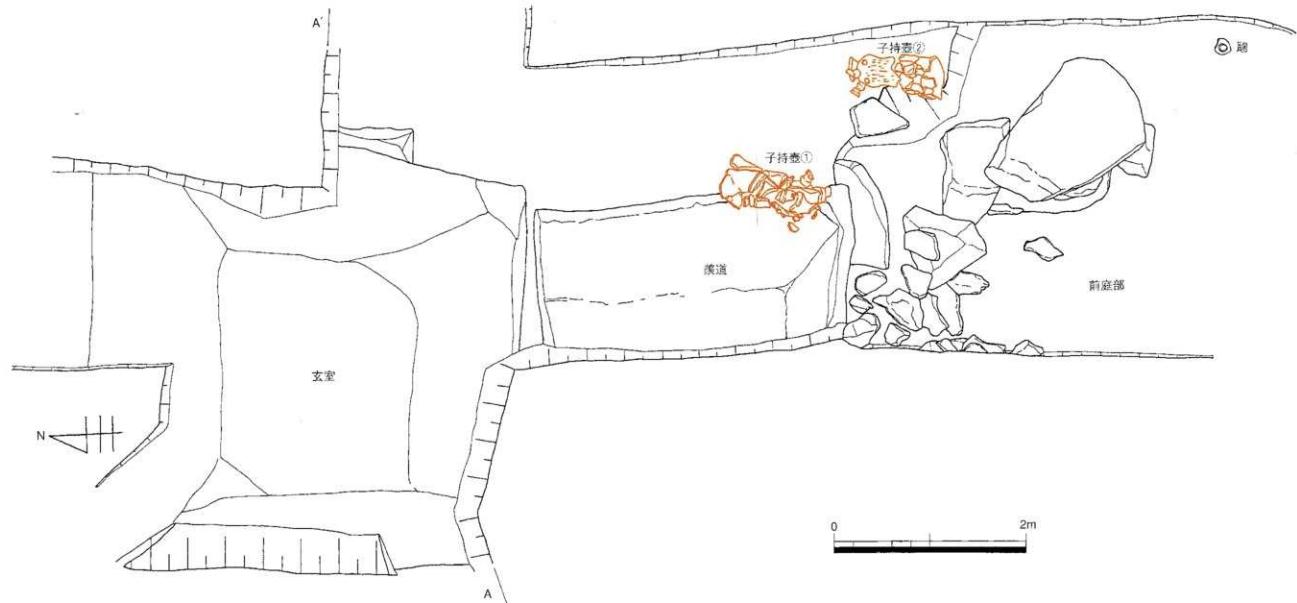
第6図 平成6年度子持壺出土状況



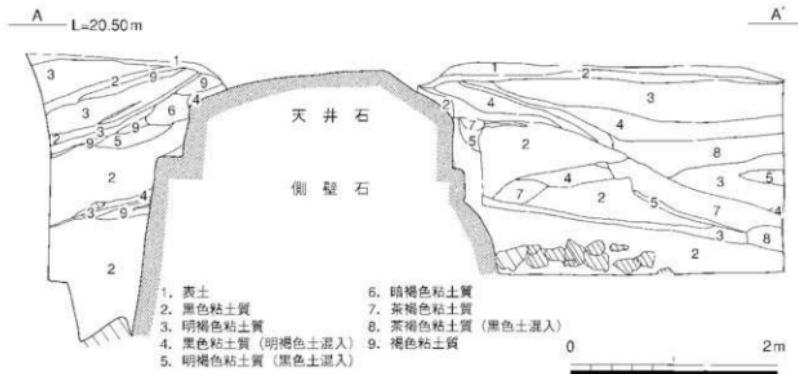
子持壺①出土状況



子持壺②出土状況



第7図 平成6年度向山1号墳主体部平面図



第8図 平成6年度主体部セクション図



美庭部土層堆積状況



石室東側土層堆積状況

1号墳西側にトレンチを設定して調査したところ、表土下約20cmの暗褐色粘質土中より子持壺（須恵器）の口縁部が、表土下約70cmの茶褐色粘質土中より壺（土師器）の口縁部がそれぞれ出土した。平成7年度においてはこれをBトレンチと呼んで、東西に延長して調査を実施している。



1号墳西側土層堆積状況

平成7年度調査

平成6年度の調査時に設定された石室上軸の北側トレンチを延長したAトレンチでは、玄室から北へ13m地点で墳壠とみられる土層の変化があり、その外側（北側）に子持壺がおびただしい破片となって発見された。このことにより南北の大きさは前庭部の未調査部分までを含めると20m以上になるものと考えられる。

また石室の北约10mでAトレンチに直交するBトレンチを設定し西側の墳壠を求めて調査したところ、石室主軸線より西へ11m余りの地点で昭和45年当時に削平された墳丘の立ち上がりが見つかったが、墳丘基盤の削り出しあはさらに西へ5m程度広がり、上軸より16m地点まで続くことがわかった。このテラス部分に本来盛上があったのかどうかは確認できなかった。Bトレンチ拡張区のa地点とDトレンチのb地点においても地山の削り出しが認められ、その斜面途中と辺付近の地山の風化層中に倒れ込んだ状態の子持壺が見つかった。いずれも石室上軸より約16mの距離にある。これらの結果を総合して考えると石室より西側の状況は約16mの距離に1段目のテラスがあり、その5m内側から2段目の墳丘が立ち上がる2段築成の方形を呈することが考えられる。

この2段築成の可能性は石室の東に隣接する中島氏宅の庭の坪堀り調査（Iトレンチ）において、主軸より約12mの地点で盛土が落ち込んでいることからも推定できる。

中島氏宅の東に隣接する主軸より25mの公園のトレンチ調査（Jトレンチ）においては、墳丘はここまで及んでおらず自然の山の堆積層が確認されたのみであった。

石室の壁石の外側には10~40cm大の礫・転石が大量に積み上げられていた。石室の支えと排水の役割を果たしていたものと考えられる。

AトレンチとCトレンチの北端で地山をカットして墓域を設定したと考えられる段が発見された。石室の横軸線からは19m前後の距離にある。

石室の背後約7mの墳丘
基盤上で、少し打ち欠いて
丸めた状態の青メノウと土
師器环と碗が伏せて置いて
あるのが発見された。占墳
を築造する前の祭祀に使わ
れたものではないかと考え
られる。

1号の内部主体は凝灰岩
の一枚石を組み合わせて構
築した玄室と羨道に自然石
を積み上げた前庭部のつく
石棺式石室で南に開口す
る。



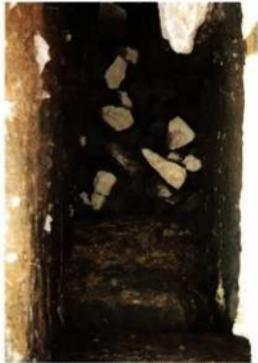
向山1号墳 石棺式石室



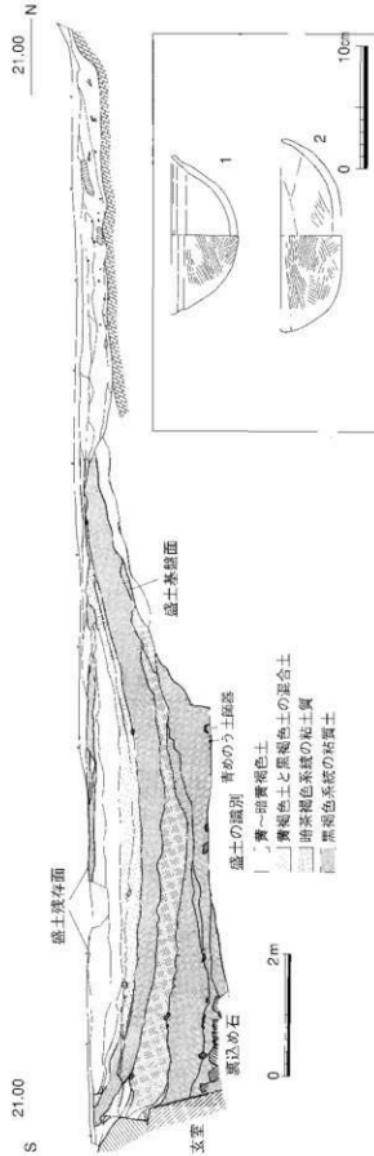
A トレンチ北側子持壺出土状況



A トレンチ土師器杯出土状況



A トレンチ裏込め石出土状況



第9図 向山1号墳Aトレンチ土層断面図

平成6年度出土子持壺について

No.1は羨道東端上より出土。子持壺①(須恵器)のほぼ完形品である。推定口径17.0cm、高さ50.5cm、底径23.0cm。親壺は底部が存在せず、四方に円孔を穿ち、親壺肩部に底のある子壺4個を接合し、子壺底部と親壺肩部を同時に穿孔する。子壺は口縁、頸部、肩部を明確に区別できる。親壺と脚部の境には突帯を巡らしている。脚部は裾広がりになっており、上半部に三角形の透かし孔が2個あり、1条の沈線を有す。親壺は小型で脚部は長く裾広がりになっているため均整のとれた形をしている。手法の特徴として、親壺外面は平行叩き後軽く回転ナデを施す。内面は回転ナデを施す。子壺は内外面ともに回転ナデ、親壺と子壺の接合部は静止ナデ、脚部外面は何らかの軽い工具によるタテナデ、内面は荒い回転ナデ、脚端部は内外面ともにヨコナデがそれぞれ施されている。

No.2は羨道東側より出土。子持壺②(須恵器)のほぼ完形品である。推定口径14.2cm、高さ50.8cm、底径21.6cm。親壺は底部が存在せず、三方に円孔を穿ち、親壺肩部に底のない子壺を接合し、刀子等の工具で子壺と親壺との接合部を穿孔する。子壺は推定口径7.7cm、高さ8.5cmで口縁、頸部、肩部を明確に区別できる。親壺と脚部の境は不明瞭で突帯はない。親壺は比較的小く脚部が長く裾広がりの形態を擁するため均整のとれた形をしている。脚上半部に縱長長方形の透かし孔が3個あり、4条の沈線を有す。手法の特徴として親壺外面は孔より上部において回転ナデ、下部において平行文叩き後カキメが施されている。内面は孔より上部において回転ナデ、下部において円弧状文叩き後軽くヨコナデが施されている。子壺については内外面とも回転ナデ、脚部外面は下から上方へのカキメ、脚端部外面はナデつけ、脚部内面は斜め方向のナデがそれぞれ施されている。

第1表 平成6年度出土子持壺

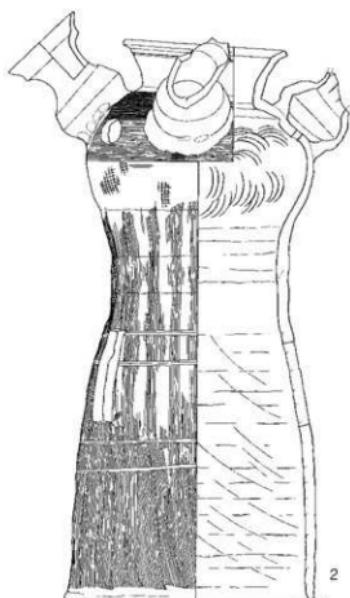
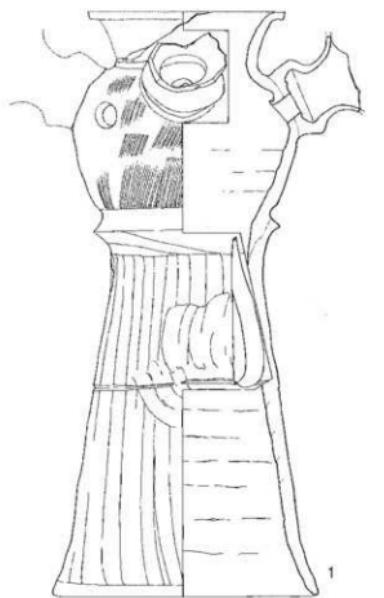
No.	種類 器種	法量(cm)	形態・文様・手法の特徴	出土地点	
				1	2
1	須恵器 子持壺 ①	口径 17.0 高さ 50.5 底径 23.0	・親壺は四方に孔を穿つ ・親壺と脚部の境に突帯 ・脚部に一条の沈線 ・脚上半部に三角形の透かし	羨道東端上	
2	須恵器 子持壺 ②	口径 14.2 高さ 50.8 底径 21.6	・親壺は三方に孔を穿つ ・親壺と脚部の境が不明瞭 ・脚部に四条の沈線 ・脚上半部に四角形の透かし		羨道東側



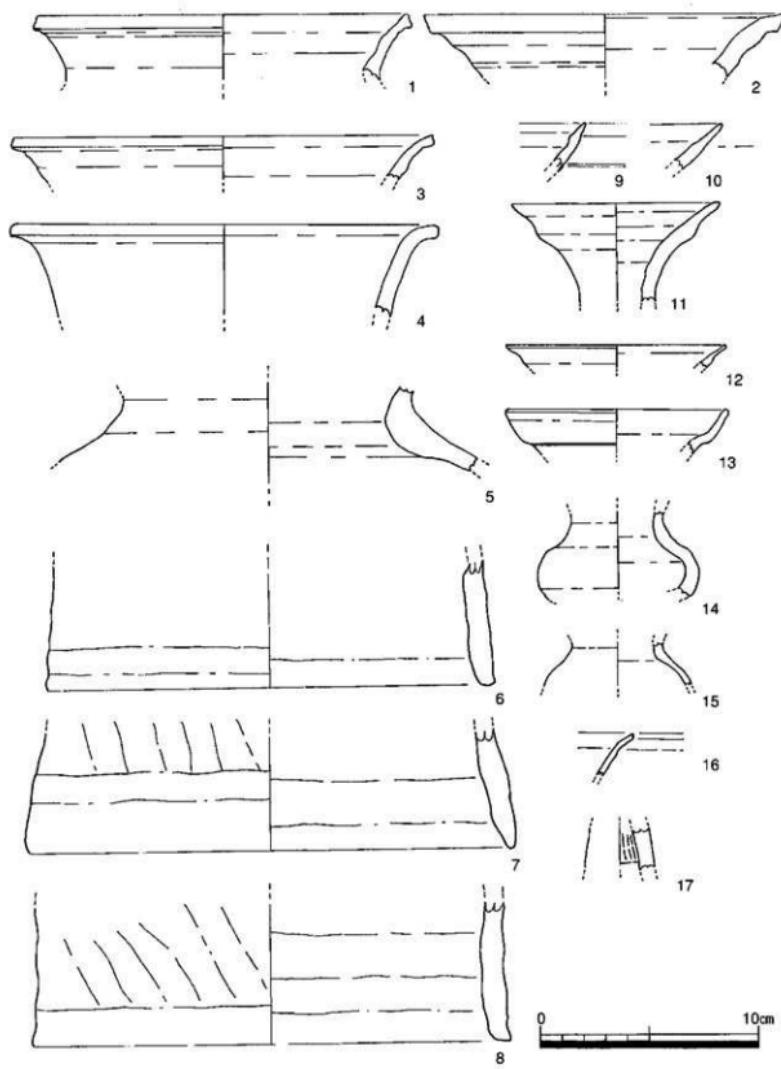
○ 子持壺①



○ 子持壺②



第10図 平成6年度出土子持壺実測図



第11図 平成6年度出土遺物実測図

第2表 平成6年度出土遺物について

No.	種類	器種	法量(cm)	形態・文様・手法の特徴	出土地点
1	須恵器	子持壺	推定口径 16.8	口縁部残存、1条の沈線内外面ともに回転ナデ。	羨道入口部
2	須恵器	子持壺	推定口径 17.4	口縁部残存、1条の凸線あり、内外面ともに回転ナデ。	羨道入口部
3	須恵器	子持壺	推定口径 19.2	口縁はやや外傾、内外面ともに回転ナデ。	埴輪西側トレンチ
4	須恵器	子持壺	推定口径 22.2	口縁はやや外傾、内外面ともに摩滅。	羨道入口部
5	須恵器	親壺	—	頸基部及び肩一部残存、内外面ともに摩滅。	羨道西側
6	須恵器	子持壺	推定口径 20.2	外面はヘラ削り後脚端部回転ナデ。 内面は回転ナデ後脚端部ナデ。	羨道東側
7	須恵器	子持壺	推定口径 22.1	外面はヘラ削り後脚端部回転ナデ。 内面は回転ナデ後脚端部ナデ。	羨道東側
8	須恵器	子持壺	推定口径 22.0	外面はヘラ削り後脚端部回転ナデ。 内面は摩滅	羨道入口部
9	須恵器	子壺	—	口縁から頸基部にかけて一条の沈線あり、内外面ともに回転ナデ。	石室北側
10	須恵器	子壺	—	内外面ともに回転ナデ。	羨道南側
11	須恵器	子壺	推定口径 9.6	口縁は外反する、内外面ともに回転ナデ。	羨道南側
12	須恵器	子壺	推定口径 10.0	口縁はやや外傾、外面は回転ナデ。 内面は摩滅。	羨道入口部
13	須恵器	子壺	推定口径 10.2	口縁から頸基部にかけて一条の沈線あり、内外面ともに回転ナデ。	羨道入口部
14	須恵器	子壺	—	頸部から肩部にかけて残存、内外面ともに回転ナデ。	羨道入口部
15	須恵器	子壺	—	頸部及び肩一部残存、外面は摩滅 内面は回転ナデ。	羨道南側
16	土師器	壺	—	口縁はやや外傾、内外面共に摩滅。	羨道入口部
17	土師器	高杯	—	脚筒部内面にしづり痕あり。	羨道入口部

平成 6 年度出土遺物について

No.1～4 は子持壺（須恵器）の口縁部で口縁は外傾する。No.1、2、4 は漢道入口から、No.3 は埴裾西側からそれぞれ出土している。

No.5 は子持壺（須恵器）の肩部で漢道西側より出土。内外面とも摩滅しているため調整は不明。

No.6～8 は前室東側及び南側トレンチより出土。子持壺（須恵器）の脚部である。底径は 20～22cm を測り、外面はヘラ削り後脚端部において回転ナデ、内面は回転ナデ後脚端部においてナデが施されている。

No.9～15 は子壺（須恵器）の口縁部、肩部、胴部の破片である。口縁端部は外傾、肩部はよく張っており、橢状の形態で内外面ともに回転ナデが施されている。漢道入口から出土している。

No.16 は壺（土師器）の口縁部で口縁はやや外傾し、内外面共に摩滅しているため調整は不明。

No.17 は高坏（土師器）の脚部で、脚筒部内面にしづら痕がある。漢道入口より出土している。

平成 7 年度盛土内出土子持壺について

No.1 は A トレンチ北側埴裾と思われる箇所のやや北側より出土。推定口径 13.2cm、推定受部径 14.2cm、残存高 45.5cm を測る。親壺は底部は存在せず、円孔箇所が見受けられる。子壺が存在したと思われる箇所には穿孔した痕跡が残る。親壺は比較的小型で脚部の境には突帯を巡らしている。脚部は裾広がりになっており、外面に 2 条の沈線を有し、内面には粘土の黒ぎ日が見られる。手法の特徴として親壺の外面は回転ナデ及び一部縦ナデ、内面は回転ナデを施す。脚部外面は縦ナデ、内面は斜めナデを施す。

No.2 は B トレンチ拡張区の a 地点より出土。推定口径 15.4cm を測る。親壺肩部に子壺 4 個を接合したと思われるが、完全に穿孔したかは不明である。親壺の内面についた箇所が見られる。子壺は口縁部、胴部、底部の区別が明瞭である。手法の特徴としては親壺の外面は孔より上面は回転ナデ、下は外面はナデ、内面は回転ナデ及びヘラケズリを施す。



A トレンチ子持壺出土状況

No.3 は B トレンチ拡張区の a 地点より出土。推定口径 15.0cm を測る。親壺の底部は存在せず、円孔を穿つ箇所が見られる。親壺口縁外面に波状文及び 2 条の沈線があり、親壺肩部に子壺 4 個を接合したと思われ、子壺底部と親壺肩部を同時に穿孔する。子壺の肩部はあまり張らない。手法の特徴としては親壺の外面は孔より上面は回転ナデ、下は外面は回転ナデ及びナデ、内面は回転ナデ、脚部外面はカキメ調整、内面はヘラケズリを施す。

No.4はBトレーンチ拡張区のa地点より出土。推定口径15.7cm、受部径17.7cm、底径21.7cm、高さ51.1cmを測る。親壺は底部は存在せず、四方に円孔を穿ち、親壺肩部に底のある子壺4個を接合し、子壺底部と親壺肩部を同時に穿孔する。子壺は肩部と胴部の区別が明瞭ではない。親壺と脚部の境には突帯を巡らしている。脚部はやや裾広がりになっている。脚部外面には三角状の透かしが二方にある。手法の特徴としては親壺内外面は孔より上面は回転ナデ、下は外面平行文叩き、内面円弧状當て具痕が残っている。子壺は内外面共回転ナデ。脚部内外面はタテナデ及び斜めナデ、脚端部は内外面共ヨコナデを施す。

No.5はDトレーンチb地点より出土。推定口径13.0cm、受部径14.5cm、底径21.0cm、高さ55.0cmを測る。親壺は肩があり張らず、底部は存在しない。四方に円孔を穿ち、親壺肩部に底のある子壺4個を接合し、子壺底部と親壺肩部を同時に穿孔する。子壺は口縁、胴部、底部の区別が明瞭である。親壺と脚部の境には突帯を巡らしている。脚部外面に方形の3方透かしがあり、やや裾広がりになっている。脚部外面には三角状の透かしが3方にある。手法の特徴としては親壺内外面は孔より上面は回転ナデ、下は外面平行文叩き、内面円弧状當て具痕が残っている。子壺は内外面共回転ナデ。脚部内外面はタテナデ及び斜めナデ、脚端部は内外面共ヨコナデを施す。



Bトレーンチ子持壺出土状況



Dトレーンチ子持壺出土状況

Aトレーンチ出土土師器について

Aトレーンチ茶褐色粘質土層より土師器2個出土した。1は口径13.0cm、器高5.4cmを測る。口縁は外傾し、口縁端部の器壁は薄く、内面は内弯する。外面はヨコナデ及びハケメ調整、内面はハケメ調整及びヘラミガキを施す。2は口径15.8cm、器高4.9cmを測る。口縁は外傾し、内面は内弯、底部はやや平坦である。外面は口縁がハケメ調整、底部がナデ、内面はナデ及びヘラミガキを施す。



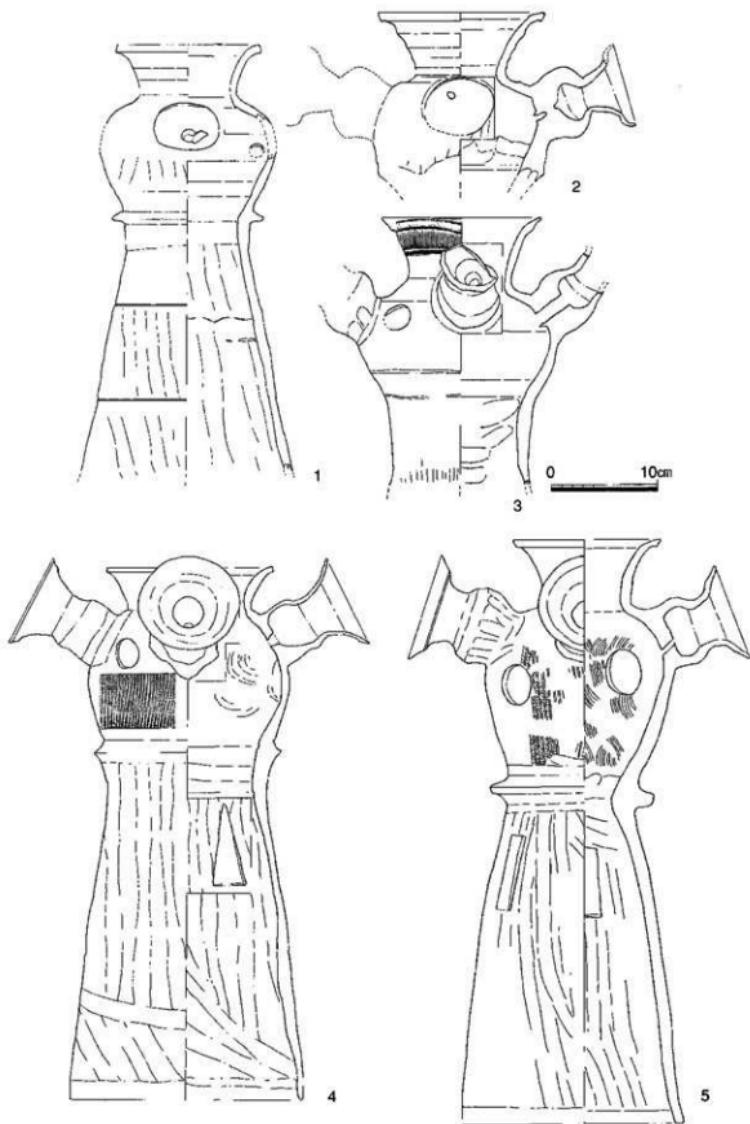
○ Aトレーンチ出土土師器・メノウ

第3表 向山1号墳盛土内出土子持壺一覧表

No.	種類	器種	法量(cm)	形態・文様・手法の特徴	出土地点
1 須恵器	子持壺	推定口径 13.2 推定受部径 14.2		親壺の底部は存在せず、肩部の子壺が存在したと思われる箇所に穿孔した痕跡、脚部外面に2条の沈線あり。	A トレンチ北側 埴掘
		口径 15.4		親壺肩部に子壺を4個接合したと思われるが、完全に穿孔したかは不明である。子壺は口縁、胴部、底部の区別が明瞭である。	B トレンチ拡張区 a 地点
3 須恵器	子持壺	口径 15.0		親壺の底部は存在せず、円孔を穿つ箇所が見られる。親壺口縁外面に波状文及び2条の沈線あり。親壺肩部に子壺を4個接合したと思われ、子壺底部と親壺底部を同時に穿孔する。	B トレンチ拡張区 a 地点
4 須恵器	子持壺	口径 15.7 受部径 17.7 底径 21.7 高さ 51.1		親壺の底部は存在せず、四方に円孔を穿ち、子壺を4個接合し、子壺底部と親壺底部を同時に穿孔する。親壺と脚部の境に突堤を巡らす。	B トレンチ拡張区 a 地点
5 須恵器	子持壺	口径 13.0 受部径 14.5 底径 21.0 高さ 55.0		脚部に2方面透かしあり。环部外面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、脚部内外面は回転ナデ。	D トレンチ拡張区 b 地点



盛土内出土子持壺



第12図 盛土内出土子持壺実測図

平成 9 年度調査

平成 7 年度の調査結果を受けて、1 号墳の墳丘範囲を確定するため西側及び南側にトレントを 2 本設定した。

K トレント南側で盛土の基盤層と思われる黒色粘質土層まで重機による削平を受けていたため、墳裾は確認できなかつた。東側では子持壺が暗褐色粘質土層より出土していることから、他のトレントより密集して出土した子持壺の破片同様ここに子持壺を配した可能性がある。また、子持壺が占墳の基盤層である黒色粘質土層と暗褐色粘質土層の間から出土したことから盛土がわずかに残っていることが判明した。また、墳丘の基盤面である黒色粘質土層が平坦に近くなってきたことから墳裾が近いものと考えられたが、更に東側延長上には宅地があり削平されていたため墳丘範囲を確定するに至らなかつた。黒色粘質土中より弥生式土器及び上師器の細片が出土している。

L トレントも K トレント同様、黒色粘質土層まで削平を受けていたことから墳丘範囲の決め手にはならなかつた。遺物は黒色粘質土より上層からは出土しなかつたが、黒色粘質土中より上師器の細片が数点出土した。

以上のことから、造成範囲が予想以上に大きかつたため 1 号墳の墳丘範囲を確定することは不可能であった。



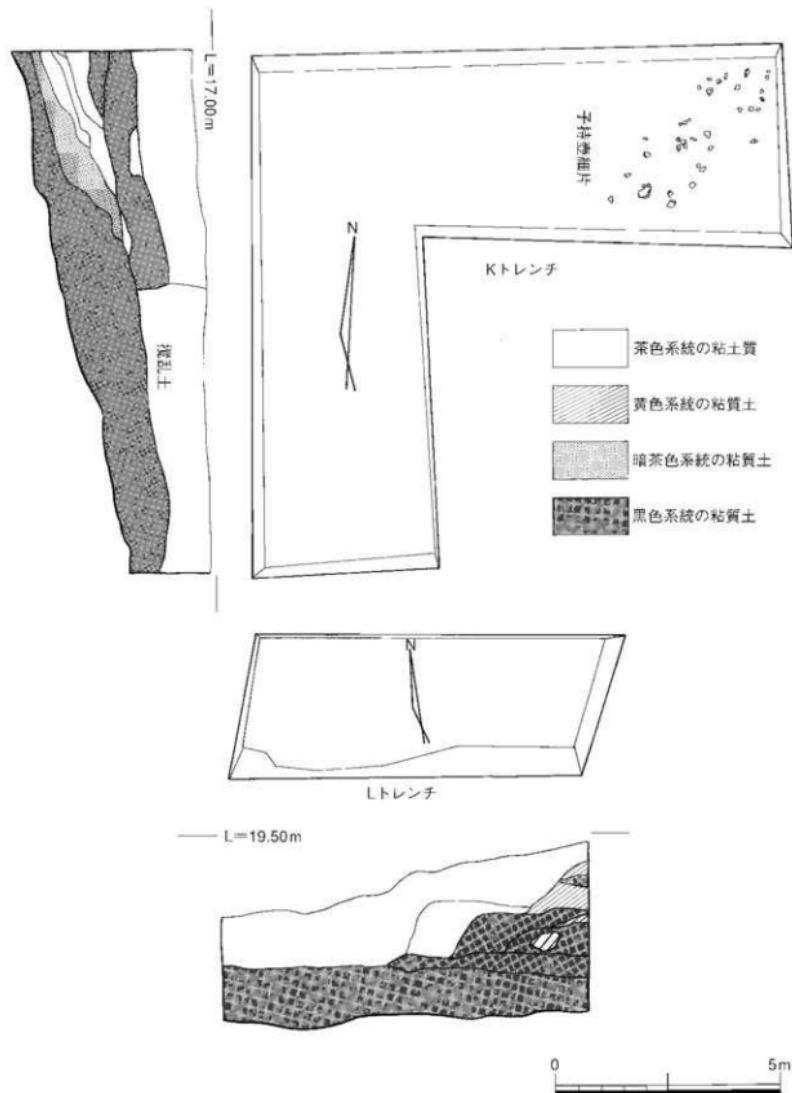
K トレント東側子持壺細片出土状況



K トレント北側土層堆積状況



L トレント東側土層堆積状況



第13図 K・Lトレンチ調査成果図

平成9年度出土遺物について

No.1～3は須恵器で子持壺の親壺、No.4、5は子持壺の子壺、No.6は甕、No.7～12は土師器の壺、No.13～17は高坏である。

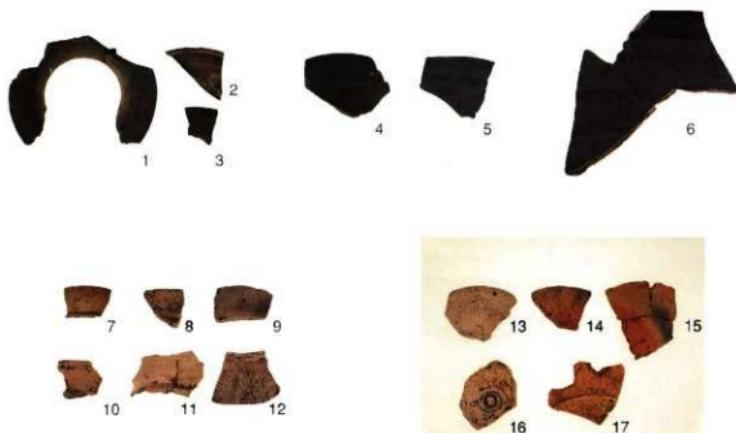
No.1は推定口径17.2cm、No.2は推定口径15.5cm、No.3は推定口径15.8cmをそれぞれ測る。口縁は外傾し、内外面とも回転ナデを施す。

No.4は推定口径9.1cm、No.5は推定口径9.2cmをそれぞれ測る。口縁は外反し、内外面とも回転ナデを施す。

No.6は須恵器壺で外面に2ヶ所波状文を施し、口縁は外傾する。

No.7は推定口径11.0cmを測る。口縁は外傾しており、内外面とも摩滅しているため手法・調整は不明である。No.8は壺で推定口径13.2cm、No.9は推定口径15.6cm、No.10は推定口径20.0cmをそれぞれ測る。口縁端部は内面に肥厚し、口縁は外傾する。内外面ともヨコナデを施す。No.11は肩部の器壁は薄く、外面はヨコナデ、内面はヨコナデ及びヘラケズリを施す。No.12は肩部はやや丸みを帯びている。外面はハケメ調整、内面はヘラケズリを施す。

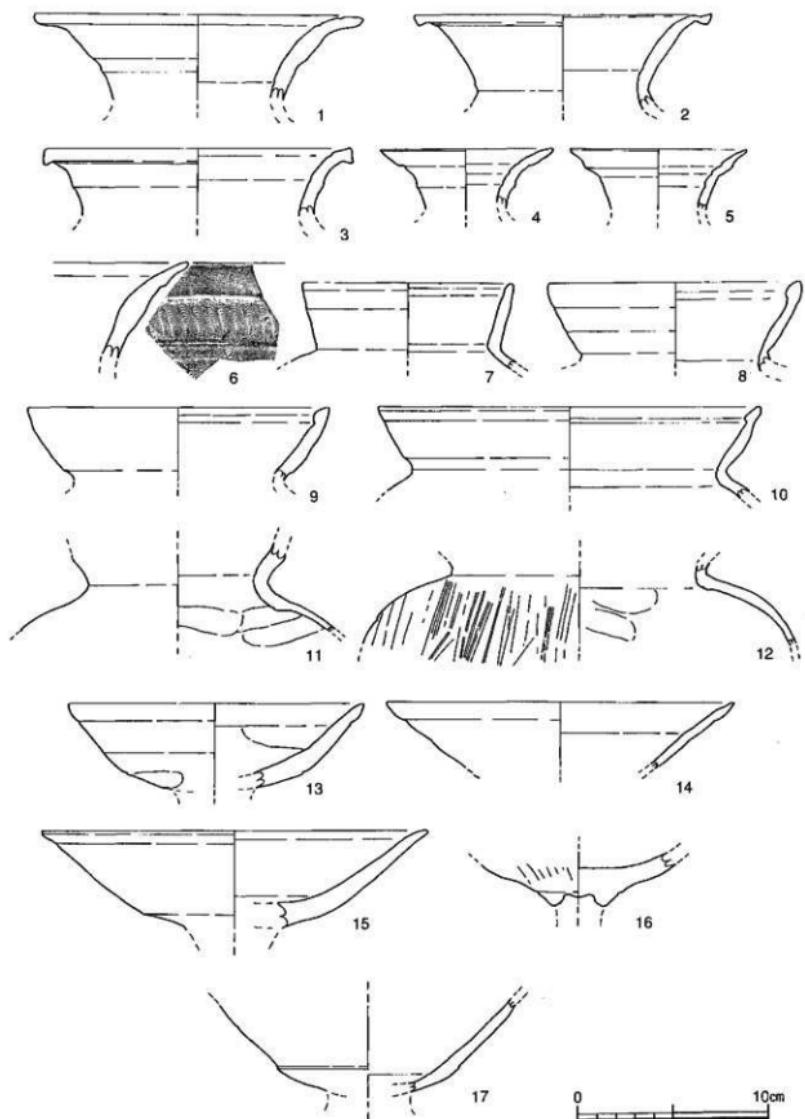
No.13は推定口径15.5cmを測る。口縁は外傾し、壺部内面は内弯する。外面はヨコナデ及びヘラケズリ、内面はヨコナデ及びヘラケズリ、ヘラミガキを施す。No.14は推定口径18.2cmを測る。口縁は外傾し、外面はヘラミガキ、内面は摩滅している。No.15は推定口径20.2cmを測る。口縁は大きく外傾する。外面は摩滅しているが、内面はヨコナデを施す。No.16は壺部内面は内弯し、器壁は厚い。外面はハケメ調整、内面はナデを施す。No.17は口縁は外傾し、壺部内面はやや内弯する。内外面とも摩滅している。



Kトレンチ出土遺物

第4表 平成9年度出土遺物一覧表

No.	種類	器種	法量(cm)	形態・文様・手法の特徴	出土地点
1	須恵器	親壺	推定口径 17.2	口縁は外傾する。内外面とも回転ナデ。	暗褐色粘質土
2	須恵器	親壺	推定口径 15.5	口縁は外傾する。内外面とも回転ナデ。	暗褐色粘質土
3	須恵器	親壺	推定口径 15.8	口縁は外傾する。内外面とも回転ナデ。	暗褐色粘質土
4	須恵器	子壺	推定口径 9.1	口縁は外傾する。内外面とも回転ナデ。	暗褐色粘質土
5	須恵器	子壺	推定口径 9.2	口縁は外傾する。内外面とも回転ナデ。	暗褐色粘質土
6	須恵器	甕		口縁は外反する。2ヶ所に波状文あり。	暗褐色粘質土
7	土師器	壺	推定口径 11.0	口縁は外傾する。内外面とも摩滅。	黒色粘質土
8	上師器	壺	推定口径 15.8	口縁端部は内側に肥厚し、口縁は外傾する。内外面ともヨコナデ。	黒色粘質土
9	土師器	壺	推定口径 15.6	口縁端部は内側に肥厚し、口縁は外傾する。内外面ともヨコナデ。	黒色粘質土
10	上師器	壺	推定口径 20.0	口縁端部は内側に肥厚し、口縁は外傾する。内外面ともヨコナデ。	黒色粘質土
11	土師器	壺		肩部の器壁は薄い。外面はヨコナデ、内面はヨコナデ及びヘラケズリ。	黒色粘質土
12	上師器	壺		肩部はやや丸みを帯びている。外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ。	黒色粘質土
13	土師器	高坏	推定口径 15.5	口縁は外傾し、坏部内面は内窵する。外面はヨコナデ及びヘラケズリ、内面はヨコナデ及びヘラケズリ、ヘラミガキ。	黒色粘質土
14	土師器	高坏	推定口径 18.2	口縁は外傾する。外面はヘラミガキ、内面は摩滅。	黒色粘質土
15	上師器	高坏	推定口径 20.2	口縁は大きく外傾し、坏部内面は内窵する。外面は摩滅し、内面はヨコナデ。	黒色粘質土
16	土師器	高坏		器壁は厚く、坏部内面は内窵する。外面はハケメ調整、内面はナデ。	黒色粘質土
17	上師器	高坏		口縁は外傾し、内外面とも摩滅。	黒色粘質土



第14図 Kトレンチ出土遺物実測図

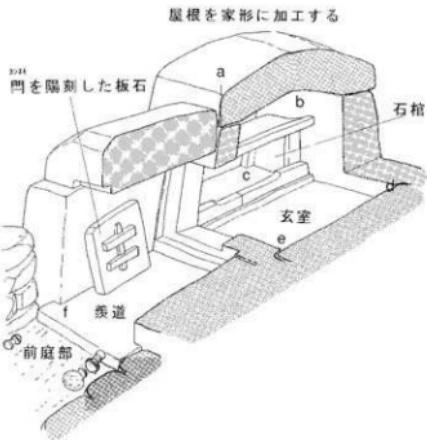
1号墳の石室について

1号墳の内部主体は凝灰岩の一枚石を組み合わせて構築した玄室と羨道に自然石を積み上げた前庭部のつく石棺式石室で南に開口する。

玄室の内法は幅2.05m、奥行き1.97m、高さ1.78mを測る。各壁は内傾し、壁の組み合せは側壁を前壁と奥壁で挟むタイプである。各壁を組み合わせるためのくり込みは前壁と奥壁に曲線的に施され、側壁にはそれに見合うように面取が行われている。両側壁は下端を逆L字状にくり込んで床石に掛けており、一方前壁と奥壁は下端を逆L字に削り出して床石と突き合わせ、この部分のレベルを少し低くして溝状の構造にし排水の機能を持たせている。また玄室内には左壁に沿って石棺を組み込んでいる。玄室の床石の左側を一段高く削り出して石棺の床面とし、溝を切って仕切り石をはめ、内側を「コ」の字状にくり込んだ側石を立て、一枚石の天井石を乗せて棺構造としている。前壁には玄門が右に寄せてくりぬかれ閉塞石を受けるためのくり込みが左右と下側に設けられている。上側にはくり込みはないが割り付け線が残っており、付近の加工痕を観察した結果、何かの手迷いか設計変更により上部が削り落とされたものであることがわかった。玄室の天井石は内外面共家形に整形加工され平入りである。内面の加工は各壁や石棺に比べるとかなり難であり、仕上げの工程を経ていないと思われる。

羨道の内法は幅1.05m、長さ1.85m、高さ1.32mを測る。左右の側壁は内傾し、羨道側では下端のくり込み部分が床石にわずかに掛かっている。床石と側壁石の下には人頭大の石が敷かれており、石室の安定と排水の機能を果たしているものと考えられる。天井石の外面は家形の一端を切り落とした形に加工されており妻入りである。玄門に接する側には段を削り出して玄室前壁上部の段に乗せるべく設計されていたようであるが羨道全体が予定より低くセットされてしまったためうまく乗らず、玄室天井石との隙間に粘土と凝灰岩のかけらを詰めて目張りを施している。内面は平天井に作り、前面には閉塞のためのくり込みが施されている。左側壁には門状の陽刻をもつ玄門の閉塞石が上部を入口側にして立てかけられていた。

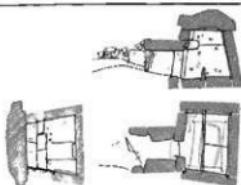
前庭は自然石を両側に積み上げて側石を構成している。右壁が6段、左壁が4段現存する。2度目の進入時に前庭の埋土を掘削した際、側壁が崩れてたくさんの石が落ち込んだものである。地形の制約により側壁の前端は確認していない。



第15図 向山1号墳石室模式図

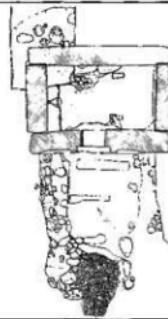
意字郡中央部

1



古天神

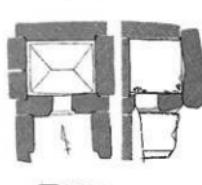
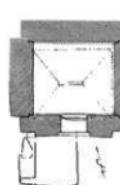
2



顶原

岩屋後

3



山代方堵

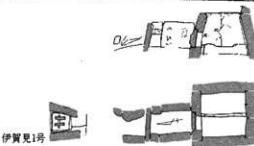
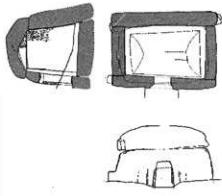
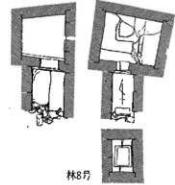
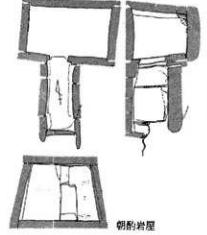
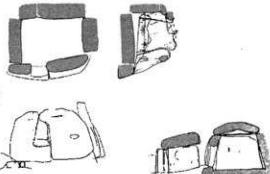
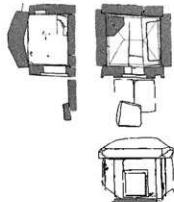
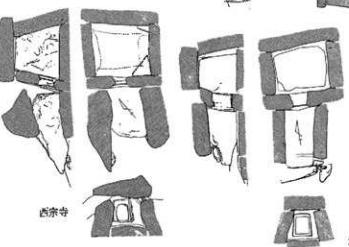
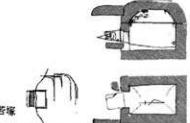
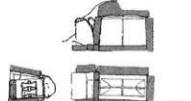
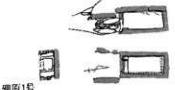
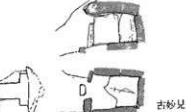


相乞山

永久宅地

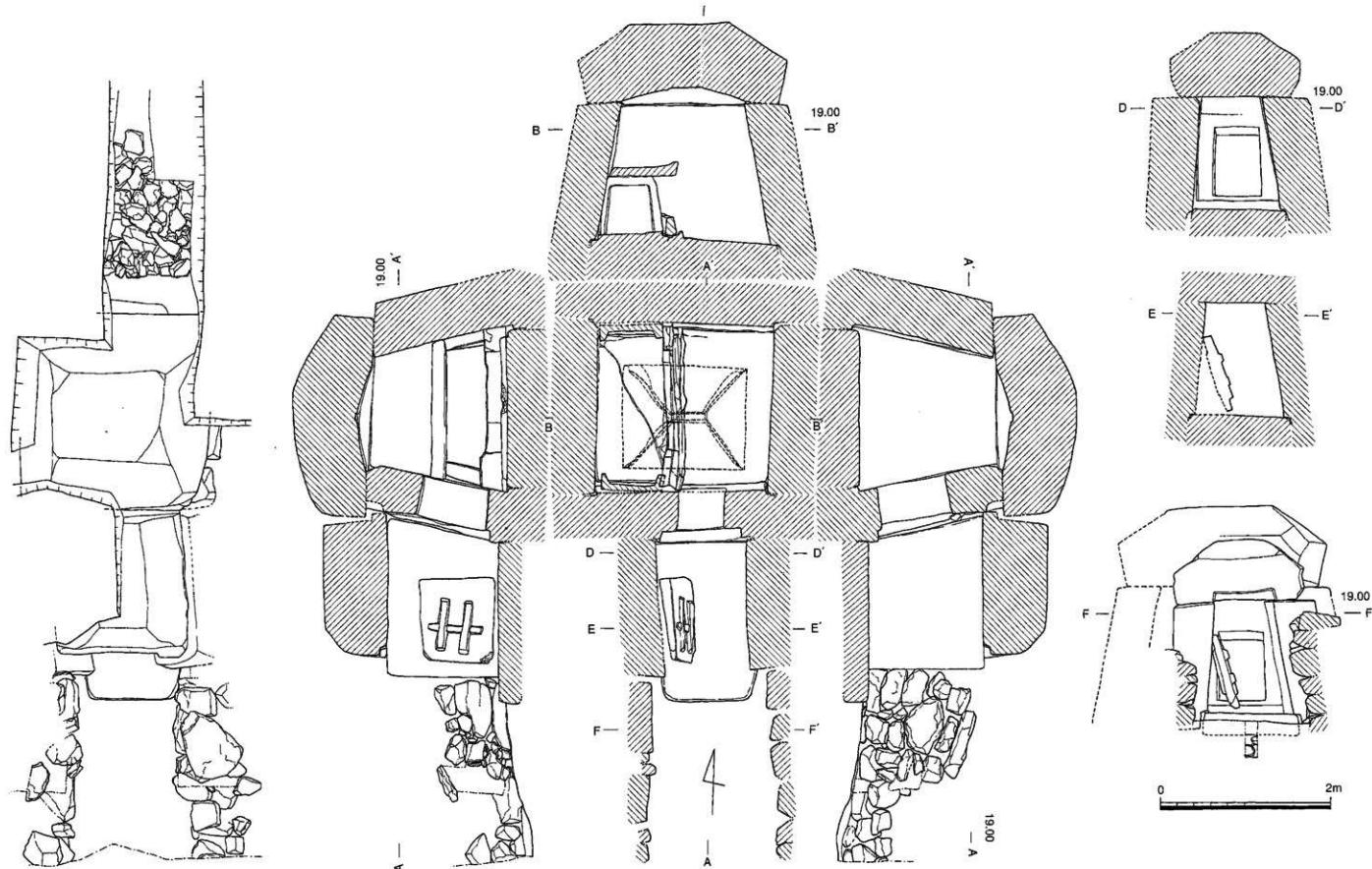
4

0 4m

意宇郡東部	意宇郡西部	島根郡朝酌周辺	島根郡持田周辺
	 伊賀見1号		
 松津神社	 黒井8号	 朝酌岩屋	 太田1号
 鏡型岩分		 朝酌上神社路	 西宗寺
 若狭	 鏡北洞	 朝酌1号	 古妙見

第16図 石棺式石室編年図

*出雲者古学研究会「石棺式石室の研究」1987年
第145図を引用



第17図 向山1号墳石室実測図

石室の細部と石組

1号墳の石室は設計段階で非常に綿密に組み立てようとした意図が随所に見て取れる。床石を石棺と一緒に作って石棺を組み込み、玄室、羨道、石棺とも側壁石はくり込みをして床石に掛け、羨道と玄室の大井石をも組み合わせるための加工を施すなど、非常に凝った構造となっている。しかし、工事の施工段階では必ずしも設計時の意図通りには構築しきれなかつたらしく、各所に修正を施しつつ仕上げられたものようである。



b. 玄室天井石内面の家形の加工痕



c. 石棺の小口石を床石にかける



a. 羨道天井石の段と玄室前壁のくりこみ



d. 奥壁のくりこみと側壁の面取り、排水



f. 羨道側壁を床石にかける



e. 前壁のくりこみと側壁の関係

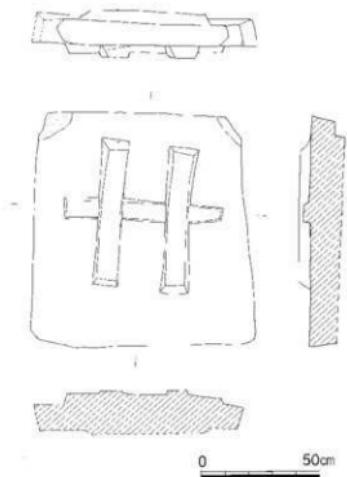
閉塞石

凝灰岩の板石を用いて、表面には門状の陽刻を施し、裏面には玄門のくりぬき部分にはめるための削りだしを設けたものである。高さは98cm、幅は上辺95cm、厚みは9~13cmある。表面の門状の陽刻は縦棒と横棒の高低差があり、横棒は右が細くなつていて左から差し込んだ状態が写実的に表現されている。

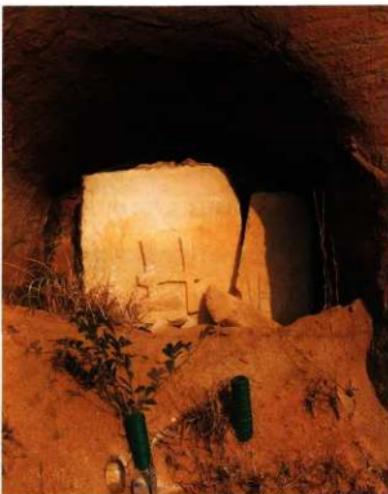
門状の陽刻をもつ閉塞石は穴道湖南岸を中心に分布し、これで県内では伊賀見1号墳、北小原横穴などを含めて7例目であるが、裏面に削りだしをもつものは他にみられない。



向山1号墳閉塞石



第18図 向山1号墳玄門閉塞石実測図



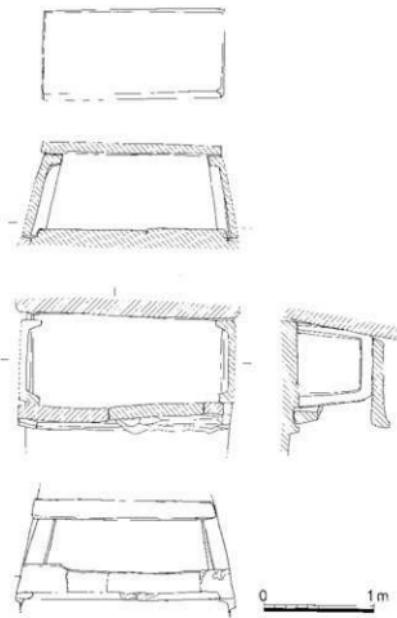
北小原横穴墓閉塞石

石棺

玄室の左壁に沿って組み込まれた石棺は、床が玄室と一体成型されて玄室床面より一段高くなっている。玄室床面との境には溝を切って浅くU字状に加工された仕切り石がはまっている。両側石は内側が「コ」の字状にくり込まれたもので、下端を丸みを帯びた逆L字状に加工して床石に掛けている。側石の上には板石の上部6cmばかりを平坦に作り、その奥を自然に丸みをつけて低くした特異な形状の大井石を乗せている。石棺の内法は幅180cm、奥行77cm、高さ65cmを測る。



石棺

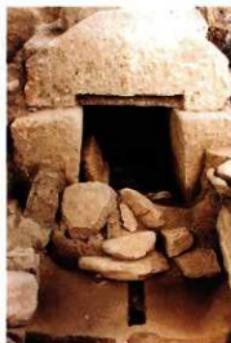


第19図 向山1号墳石棺実測図

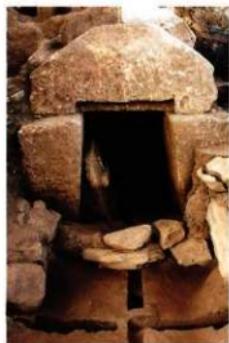
前庭～石室の調査の経緯



1. 玄門閉塞状況



2. 閉塞石石組の変わり目と玄道(第4面)



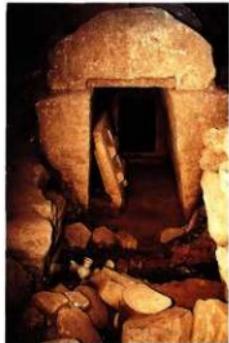
3. 同左(第3面)



4. 副葬品挿き出し面(第2面)



5. 同左をたちわりする



6. 落ち込んだ前庭側石



7. 握き出しに進入した時の掘削面
(初葬後の埋土の残存面)



8. 初葬面の遺物出土状況(第1面)



9. 完掘後の前庭～石室

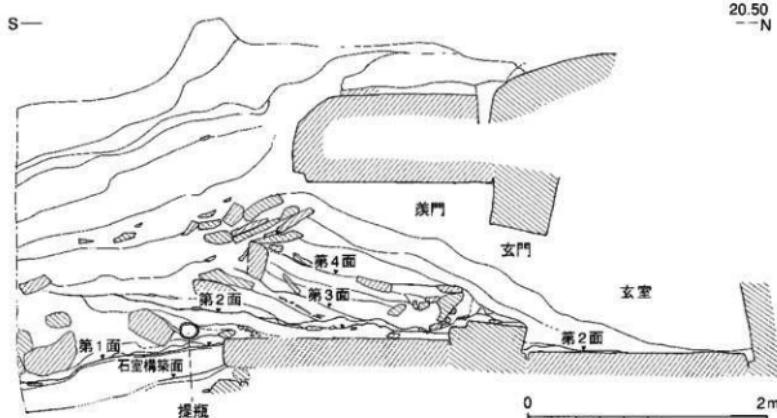
前庭～石室内の堆積土と遺物の出土状況

平成6年度に前庭部の東半分が渙門の閉塞の途中まで調査されていたので、とりあえず閉塞石の下面の土層まで下げるところ鐵錐の断片が出たのでこの面で止め、西半分に堆積した層を順に除去していった。縦断面も横断面も非常に整然とした土の堆積状況が見られ、盜掘などの痕跡は全くなかった。鐵錐出土面までの各層には子持壺の小片がかなり含まれていたが、それ以外の遺物はなかった。鐵錐出土面に達すると刀の片金具、馬具の一部、鐵錐、木片（刀の鞘か）などが発見され、追葬面と考えられた。渙門の閉塞もこの面で行われていたので、渙門の閉塞石を取り外しつつ渙道内の堆積土が面として認められるものが2面ばかり（第20図中の第4面と第3面）認識できた。出土遺物はなかった。

66個にのぼる渙門閉塞石を全て取り払い、鐵錐出上面（第2面）を追いかけて玄室まで調査を行った。渙道部では前庭の鐵錐出上層と同様の土層であるが遺物を含まない層が床石直上に堆積しており初期の流入土であると考えられた。玄門の閉塞石はこの上に立てられ掛けている。玄室内では火を焚いたらしく、大量の炭が見つかり、床石が焼けている。鐵錐や刀、弓などの遺物はバラバラの状態で炭の中や床石の割れ目、玄門上、渙道部などに見つかった。石棺内には流入土のみで遺物はなかった。第2面は追葬面と考えていたが追葬に伴う副葬品は見当たらず、ただ片付けただけの状況と思われる。玄門はこの面で木蓋を使い右で押さえておそらく2度目の閉塞をしている。前底部の第2面の下には22個にのぼる15～70cm人の石が埋まっており、須恵器4点が一部欠けた状態で石の側や間から出てきた。これらの石は前庭の両側壁から崩れ落ちた状態のまま埋まっており、副葬品を片付けた時の進入時に前庭を掘削した際、土圧で崩落したので埋め直して石室に入り、その埋土の上に初期流入土と遺物と一緒に掻き出したものである。これらの石を取り除くと進入時の掘削面が検出され、その一部はより下層に埋まった須恵器の上面まで達していた。前記の須恵器の破片がこの面で見つかったので、進入掘削時に引っかけて掘り出したものを崩れ落ちた石を埋める際に置き直したものと考える。

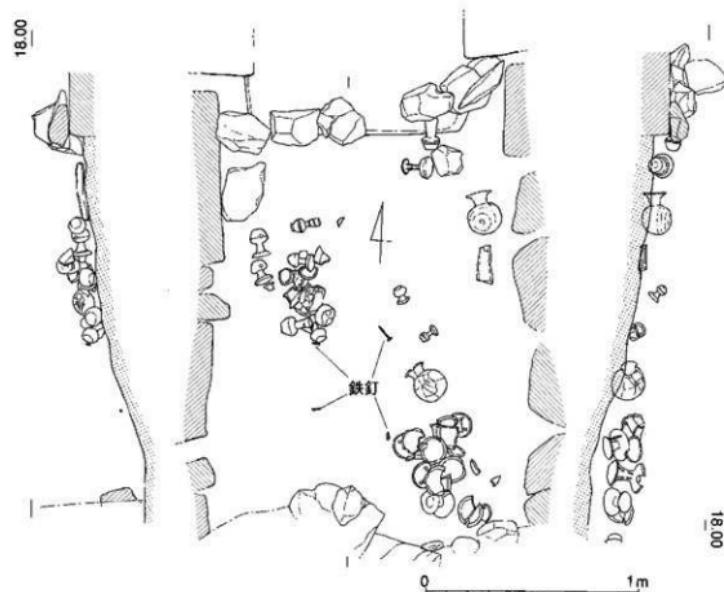
掘削面より下の埋土を取り除くと凝灰岩の削りくずを多量に含んだ縮まりのある面（第1面）があり、その上で須恵器24個と鉄釘4本が見つかった。須恵器はほぼ完形を保ち、その場で倒れた状態のものと同一器種をまとめて置いた状態のものがある。鉄釘の出土位置は不整な四辺形をなし、床面よりやや浮いている。

この床面より下は立ち削り調査を行った。第1面から約40cm下に凝灰岩の削りくずを大量に含む層がもう1層あり、渙道床石の下面でなくなっている。これが石室の設置面である。渙道床石と側壁石の下には20～30cm人の石を敷いていることを一部で確認した。



第4面：羨門塞石の積み方が変化し、それに続く土層が存在する面
第3面：同上
第2面：遺物焼き出し面（片付け面）
第1面：初葬面

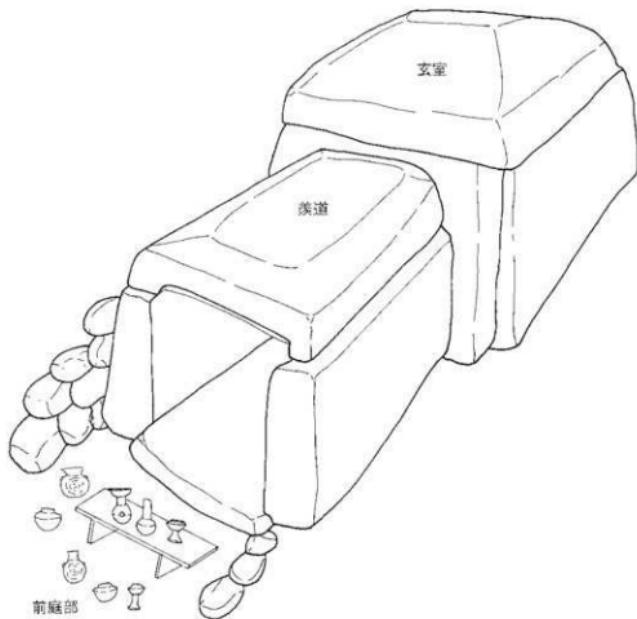
第20図 向山1号墳前庭～玄室土層断面図



第21図 向山1号墳前庭部（遺物出土状況）



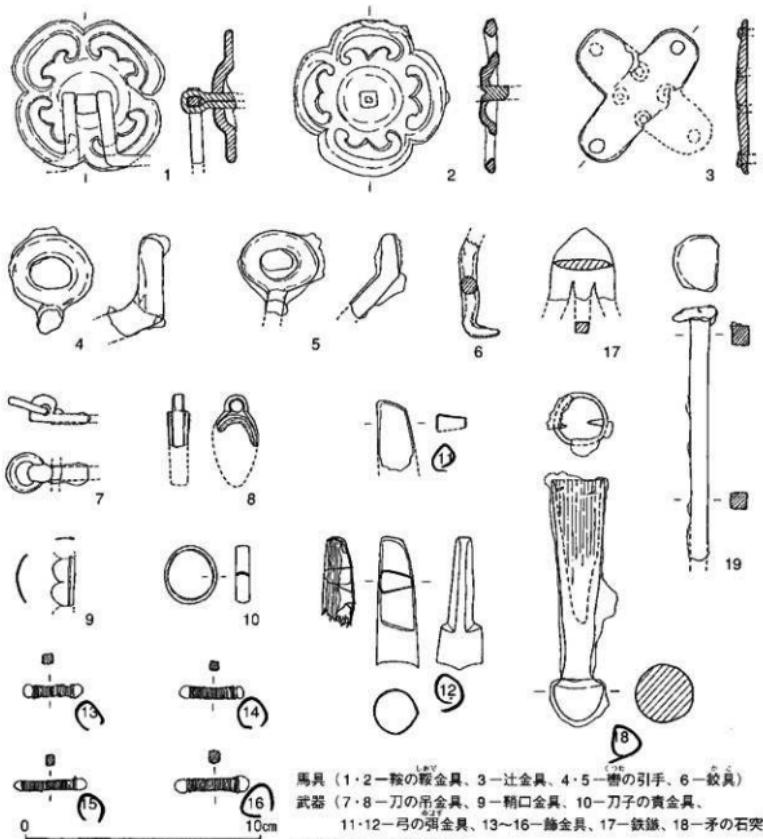
1号墳前部遺物出土状況



第22図 向山1号墳前部祭祀状況復元図

掻き出された遺物について

門状の陽刻をもつ玄門扉塞石の置かれた初期流入土の上面において、玄室から掻き出された遺物のかけらが多数発見された。副葬品には馬具、武器、玉、須恵器があり、他に鉄釘が数本ある。馬具は鞍金具（鞍の金具）、辻金具、飾金具、轡の引手蓋や鉤具などがあり、武器は銀製又は銀張の刀の吊金具、鞘金具、刀子の貴金具、弓の羽金具、飾金具、矛の石突、鉄鎌などがある。玉は琥珀製のものが1個出土した。またこれらの遺物を出土した土を洗浄した結果、1~2mm大の金箔のかけらが相当量見つかった。これらの遺物からすると埋葬当初にはかなりりっぱな副葬品が納められていたことが推察される。



第23図 馬具・武器実測図



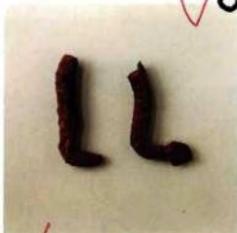
馬具一鞍の鞍金具



馬具一辻金具他



馬具一唐の引手壺



馬具一鉗具



矛の石突



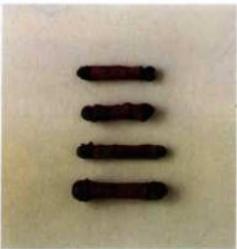
刀の鞘口金具、刀子の責金具他



刀の吊金具 2種



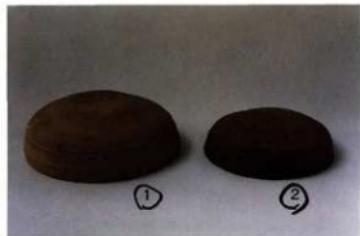
弓の頭金具



弓の飾金具 (?)



鉄鍔



蓋



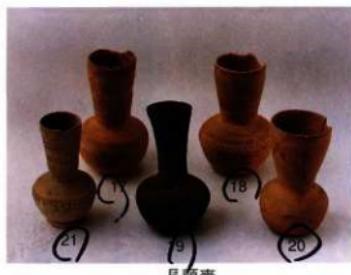
高杯



有蓋高杯



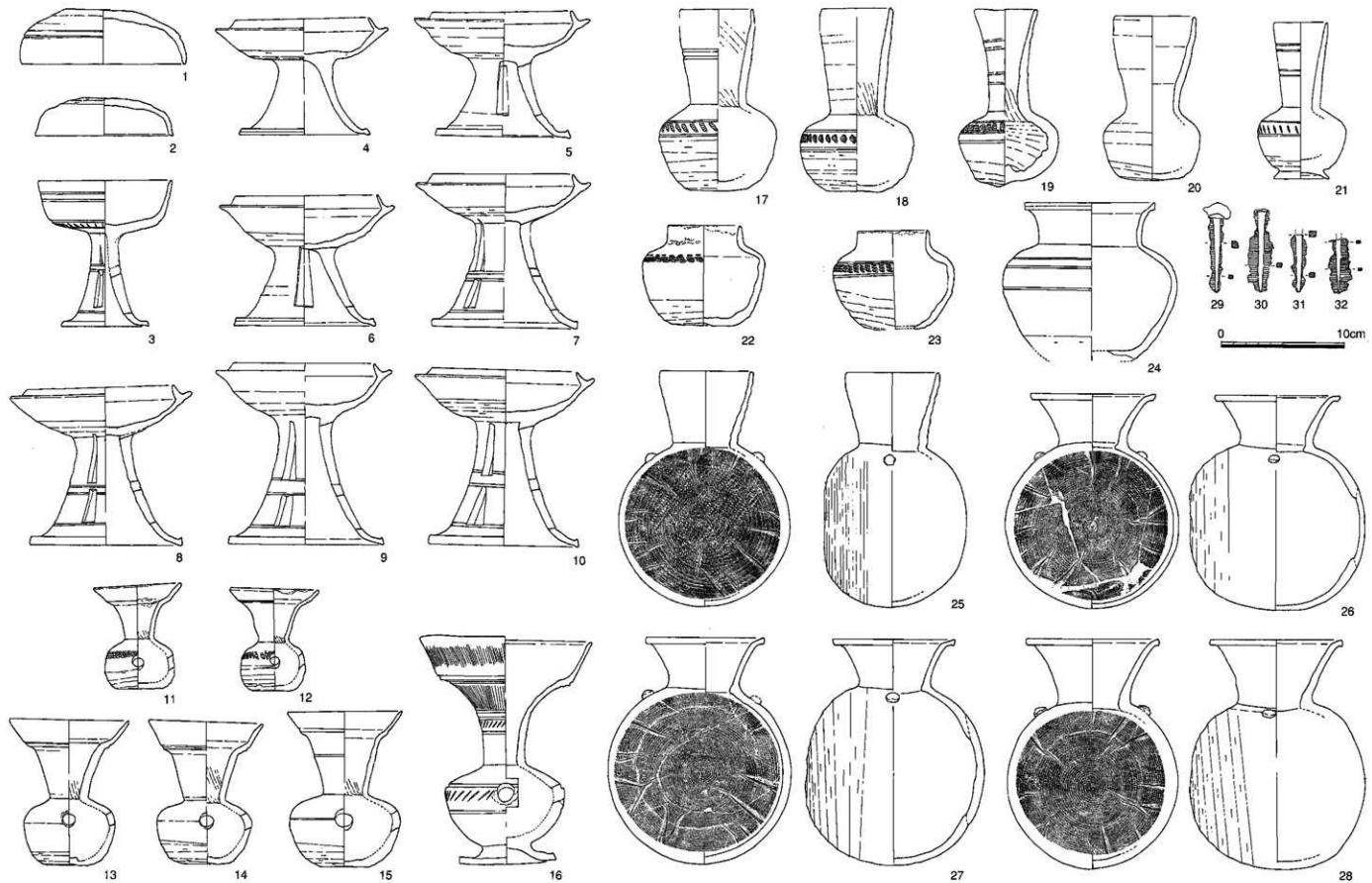
盤



長頸壺



堤瓶



第24図 向山1号墳前部出土遺物実測図

向山1号墳前庭部出土遺物について

前庭部の初葬面は凝灰岩の割り屑が一面に散らばった綿まりのある土層が薄く堆積しており、その直上から墓前祭祀に使用されたと考えられる須恵器と木質の付着した鉄釘が発見された。須恵器壺蓋1～2、高壺3、有蓋高壺4～10、壺11～16、長頸壺17～21、短頸壺22～23、壺24、提瓶25～28、鉄釘29～32などが出土しているが、須恵器については2回目の進入時に搅乱されて動いた4個体以外は原位置を示し、鉄釘は木の容器か台のようなものが存在したことを示唆している。

壺蓋1は口径13.0cm、器高4.5cmで、2は口径11.0cm、器高3.1cmを測り、共に口縁部は内外面共同転ナデ。天井部は外面は回転ヘラケズリ、内面はナデを施す。

高壺3は口径10.6cm、器高11.9cm、底径7.0cmを測り、壺部外面は回転ナデ、刺突文がある。壺部内面は回転ナデ及びナデを施す。脚部は内外面共同転ナデで3方に透かしをもつ。

有蓋高壺4は口径10.6cm、受部径13.8cm、器高9.6cm、底径10.3cm、5は口径11.3cm、受部径14.2cm、器高10.4cm、底径10.8cm、6は口径10.3cm、受部径14.1cm、器高10.6cm、底径10.2cm、7は口径11.2cm、受部径14.1cm、器高12.7cm、底径11.5cm、8は口径11.6cm、受部径14.6cm、器高13.2cm、底径12.0cm、9は口径11.3cm、受部径14.1cm、器高14.9cm、底径12.3cm、10は口径11.6cm、受部径14.5cm、器高14.5cm、底径12.1cmを測る。壺部外面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ及びナデ、脚部は内外面共同転ナデを施す。5、6は脚部に2方透かし、7～10は3方透かしを持つ。

壺11は口径7.0cm、器高8.7cm、12は口径7.0cm器高8.4cm、13は口径9.6cm、器高11.8cm、14は口径9.1cm、器高11.8cm、15は口径9.2cm、器高12.7cm、16は口径14.0cm、器高18.6cmをそれぞれ測る。口縁部は内外面共同転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリを施す。11、12は肩部外面に、16は頸部及び肩部外面に刺突文がある。

長頸壺17は口径5.8cm、器高14.9cm、18は口径5.6cm、器高15.1cm、19は口径5.2cm、器高14.3cmをそれぞれ測る。口縁から頸部にかけて内外面共同転ナデを施し、肩部外面に刺突文があり、肩部から底部は外面回転ヘラケズリを施す。17、19は頸部外面に2条の沈線がある。

長頸壺20は口径6.6cm、器高13.4cm、21は口径4.4cm、器高12.8cmをそれぞれ測る。口縁から頸部にかけて内外面共同転ナデ、底部は外面回転ヘラケズリ。21は頸部外面に2条の沈線、肩部外面に刺突文がある。

短頸壺22は口径5.8cm、器高8.1cm、23は口径6.0cm、器高8.2cmをそれぞれ測る。口縁から頸部にかけて内外面共同転ナデ、肩部外面に斜行刺突文があり、底部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデを施す。23は肩部に3条の沈線がある。

壺24は口径10.6cmを測る。口縁から肩部にかけて内外面共同転ナデ、肩部外面に浅い沈線がある。底部外面は回転ヘラケズリを施す。

提瓶25は口径7.6cm、器高19.3cm、26は口径10.2cm、器高17.6cm、27は口径9.7cm、器高18.5cm、28は口径10.8cm、器高18.8cmをそれぞれ測る。口縁から頸部にかけて内外面共同転ナデ、肩部外面は回転カキメによる最終調整をしている。肩部外面にはボタン状把手がある。鉄釘29は全長6.4cm、30は全長4.7cm、31は全長6.6cm、32は全長3.2cmを測る。

第5表 向山1号墳前庭部出土遺物一覧表

No.	種類	器種	法量(cm)	形態・文様・手法の特徴	出土地点
1	須恵器	環 蓋	口 径 13.0 器 高 4.5	大井部は平坦。口縁内外面は回転ナデ、大井部外周は回転ヘラケズリ及びナデ、内面は静止ナデ。	玄室(床石割目) 前庭
2	須恵器	環 蓋	口 径 11.0 器 高 3.1	口縁端部内面に綫い段あり。口縁内外面は回転ナデ、天井部外周は回転ヘラケズリ、内面は静止ナデ。	玄室(床石割口) 前庭
3	須恵器	高 坯	口 径 10.6 器 高 11.9 底 径 7.0	环部外面に刺突文、脚部に3方透かしあり。环部外周は回転ナデ、环部内面は回転ナデ及びナデ、脚部内外面は回転ナデ。	前庭部
4	須恵器	有蓋高环	口 径 10.6 受部径 13.8 器 高 9.6 底 径 10.3	环部外面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、脚部内外面は回転ナデ。	前庭部
5	須恵器	有蓋高环	口 径 11.3 受部径 14.2 器 高 10.4 底 径 10.8	脚部に2方面透かしあり。环部外面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、脚部内外面は回転ナデ。	前庭部
6	須恵器	有蓋高环	口 径 10.3 受部径 14.1 器 高 10.6 底 径 10.2	脚部に2方面透かしあり。环部外面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、脚部内外面は回転ナデ。	前庭部
7	須恵器	有蓋高环	口 径 11.2 受部径 14.1 器 高 12.7 底 径 11.5	脚部に3方面透かしあり。环部外面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、脚部内外面は回転ナデ。	前庭部
8	須恵器	有蓋高环	口 径 11.6 受部径 14.6 器 高 13.2 底 径 12.0	脚部に3方面透かしあり。环部外面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、脚部内外面は回転ナデ。	前庭部
9	須恵器	有蓋高环	口 径 11.3 受部径 14.1 器 高 14.9 底 径 12.3	脚部に3方面透かしあり。环部外面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、脚部内外面は回転ナデ。	前庭部
10	須恵器	有蓋高环	口 径 11.6 受部径 14.5 器 高 14.5 底 径 12.1	脚部に3方面透かしあり。环部外面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ及び回転ヘラケズリ、脚部内外面は回転ナデ。	前庭部
11	須恵器	趣	口 径 7.0 器 高 8.7	口部外面に刺突文あり。口頭部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ。	前庭部
12	須恵器	趣	口 径 7.0 器 高 8.4	脚部外面に刺突文あり。口頭部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ。	前庭部
13	須恵器	趣	口 径 9.6 器 高 11.8	口頭部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ。	前庭部
14	須恵器	趣	口 径 9.1 器 高 11.8	口頭部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ。	前庭部

15	須恵器	甌	口 径 器 高	9.2 12.7	山頭部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ。	前庭部
16	須恵器	甌	口 径 器 高	14.0 18.6	頭部及び肩部外面に刺突文、ハの字開く高台あり。口縁部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ。	前庭部
17	須恵器	長頸甌	口 径 器 高	5.8 14.9	山頭部に浅い2条の沈線、肩部外面に刺突文あり。口縁から肩部は外向回転ナデ、内面は回転ナデ及びナデ、胴部は外面回転ヘラケズリ。	前庭部
18	須恵器	長頸甌	口 径 器 高	5.6 15.1	肩部外面に刺突文あり。口縁から肩部は外向回転ナデ、内面は回転ナデ及びナデ、胴部は外面回転ヘラケズリ。	前庭部
19	須恵器	長頸甌	口 径 器 高	5.2 14.3	肩部外面に刺突文あり。口縁から肩部は外向回転ナデ、内面は回転ナデ及びナデ、胴部は外面回転ヘラケズリ。	前庭部
20	須恵器	長頸甌	口 径 器 高	6.6 13.4	口縁から胴部内外面は回転ナデ、底部は外向回転ヘラケズリ。	前庭部
21	須恵器	長頸甌	口 径 器 高	4.4 12.8	口縁部に浅い2条の沈線、肩部外面に刺突文、浅い高台あり。口縁から肩部は外向回転ナデ、内面は回転ナデ及びナデ、胴部は外面回転ヘラケズリ。	前庭部
22	須恵器	短頸甌	口 径 器 高	5.8 8.1	肩部外面に斜行刺突文あり。口縁から頸部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。	前庭部
23	須恵器	短頸甌	口 径 器 高	6.0 8.2	肩部外面に斜行刺突文あり。口縁から頸部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。	前庭部
24	須恵器	甌	口 径	10.6	肩部外面に3条の浅い沈線あり。口縁から胴部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ。	前庭部
25	須恵器	提 瓶	口 径 器 高	7.6 19.3	肩部外面にボタン状の把手を持つ。口縁部内外面は回転ナデ、胴部外面は回転カキメ調整。	前庭部
26	須恵器	提 瓶	口 径 器 高	10.2 17.6	肩部外面にボタン状の把手を持つ。口縁部内外面は回転ナデ、胴部外面は回転カキメ調整。	前庭部
27	須恵器	提 瓶	口 径 器 高	9.7 18.5	肩部外面にボタン状の把手を持つ。口縁部内外面は回転ナデ、胴部外面は回転カキメ調整。	前庭部
28	須恵器	提 瓶	口 径 器 高	10.8 18.8	肩部外面にボタン状の把手を持つ。口縁部内外面は回転ナデ、胴部外面は回転カキメ調整。	前庭部
29	鉄製品	鉄 釘	全 長	6.4		前庭部・狭道部
30	鉄製品	鉄 釘	全 長	4.7		前庭部・狭道部
31	鉄製品	鉄 釘	全 長	6.6		前庭部・狭道部
32	鉄製品	鉄 釘	全 長	3.2		前庭部・狭道部

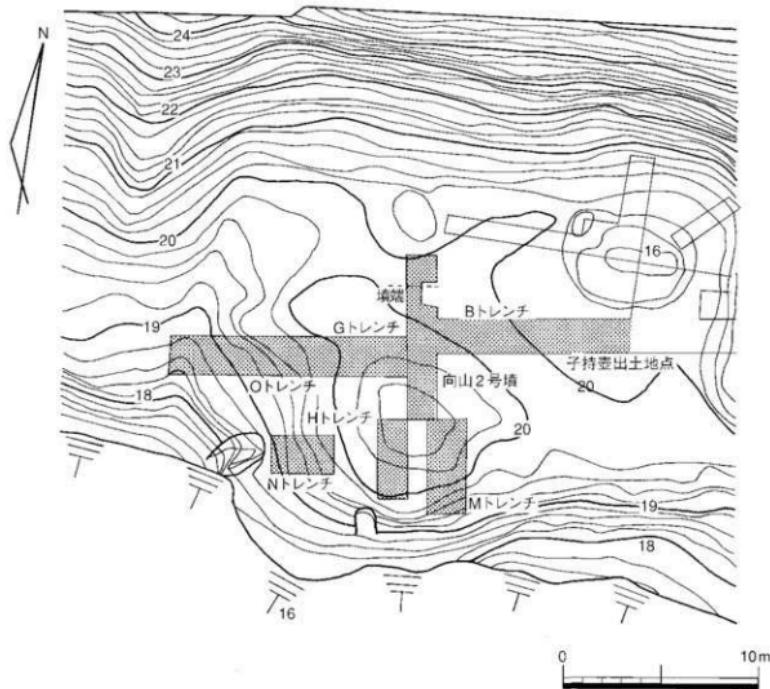
◆向山2号墳について

平成7年度調査

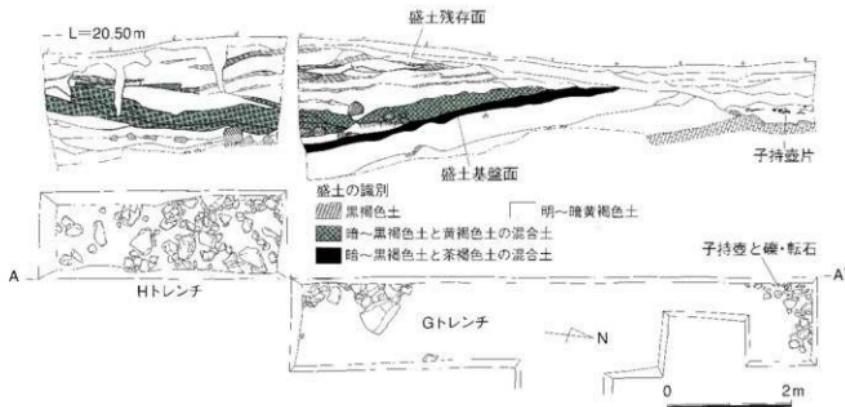
分布調査時点では現存マウンドの西北に連なる小マウンドを含めて前方後方墳と考えていたが、調査前の地形測量の結果、西南部分の地形の残存状況からすると方墳の可能性が高いと考えられ、第25図のようなトレントを設定して調査を行ったものである。

Gトレントでは現存マウンドの中心杭から北へ6.5m地点で墳壠と思われる上層の変化が見られ、その外側（北側）に子持壺の破片がまとまって出土した。盛土はいわゆる黒ボクと呼ばれる上層を基盤にし、中心杭付近で2m弱の高さがある。黄褐色系統の粘質土を主体とし黒褐色系統の粘土と互層状に積み上げて築成している。盛土の下部には10~60cm大の礫・転石がまとまって発見された。Hトレントにおいても盛土はGトレントと同様の状況を示し、盛土の下部には多数の礫・転石が存在した。

Bトレントでは2号墳北軸より東へ7m地点で盛土が途切れ、そこから2m離れたトレント壁沿いに子持壺が1個体口縁を東北に向けて倒れているのが発見されている。



第25図 向山2号墳調査地形測量図



第26図 向山2号墳Gトレンチ・Hトレンチ実測図



Gトレンチ北端の子持壺出土状況



Gトレンチ西～南壁の土層



Hトレンチ北壁の土層

向山2号墳の遺物と盛土

B トレンチ出土子持壺について

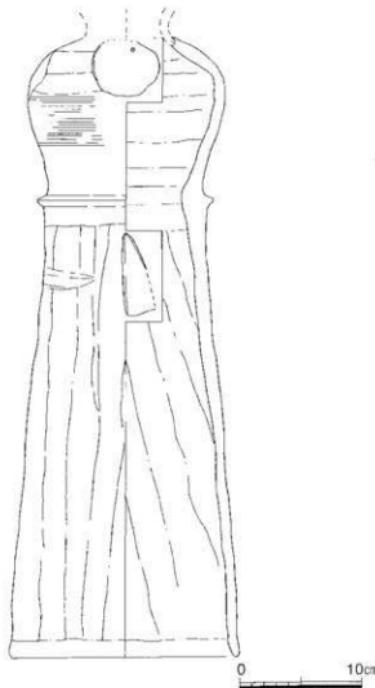
出土した子持壺は推定底径18.4cm、残存高50.8cmを測る。親壺はやや小型で、肩部を穿孔している。親壺と脚部の境には突帯を巡らしており、脚部に三角形状の透かしをもち、脚部は他の子持壺と比較して直立気味である。手法の特徴として親壺の外面は回転ナデ及びカキメ調整、内面は回転ナデを施す。脚部外面はタテナデ、内面は斜めナデ、脚端部は内外面共に横ナデを施す。



B トレンチ子持壺出土状況



B トレンチ出土子持壺



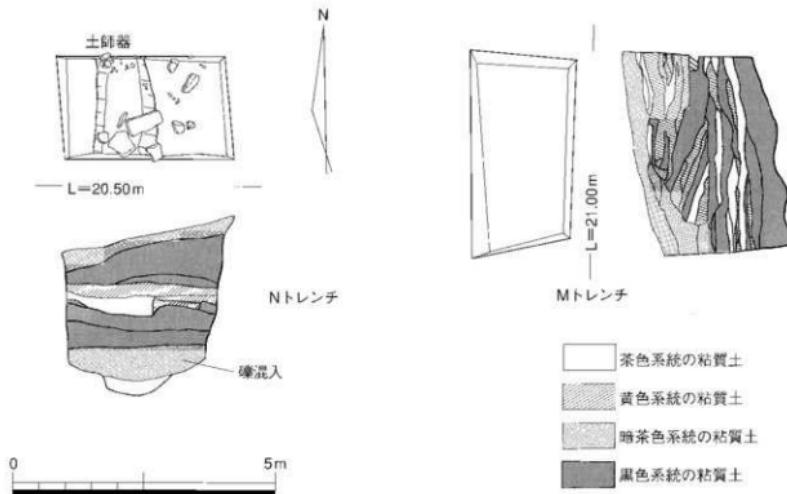
第27図 B トレンチ出土子持壺実測図

平成9年度調査

平成7年度の調査結果を受けて、2号墳が存在すると思われる箇所に墳丘規模、構造、内部主体の有無を確認するためトレンチを3本それぞれ設定した。

Mトレンチで2号墳が確認されたが、後世の削平及び攪乱により築造当時の現状を留めていない。1号墳と同様に黒色粘質土層を基盤層として黒色粘質土と黄色粘質土を互層状に積んで盛土を施していたものと考えられる。盛土内から遺物は出土しなかった。

N・Oトレンチでは表上約1.2mの黒色粘質土層迄の土層は後世の削平及び攪乱による二次堆積土がによるものと考えられ、その中から子持壺の細片が僅かに出土した。土層堆積状況から黒色粘質土層も東側から西側にかけて水平になっていることから、削平が基盤層にまで及んでいることが想像できる。黒色粘質土層内からは土師器の細片が出土していることから、古墳築造以前の住居址が存在した可能性もある。黒色粘質土層下は暗褐色粘質土、褐色粘質土が堆積しており、暗褐色粘質土層は繩文期に堆積したものと考察されるが、その時代に伴う遺構・遺物は出土していない。褐色粘質土層より疊群及び溝状のものが検出されたが、前者については岩脈の一種であり、後者については自然流路で形成されたものと考えられる。Oトレンチ西側より子持壺細片が密集して出土したことから或いは2号墳墳裾がここにあった可能性もある。



第28図 向山2号墳Mトレンチ・Nトレンチ実測図



向山 2 号墳調査前



M トレンチ西壁土層堆積状況



N トレンチ南壁土層堆積状況



N トレンチ自然流路検出状況



N トレンチ北壁側土師器出土状況



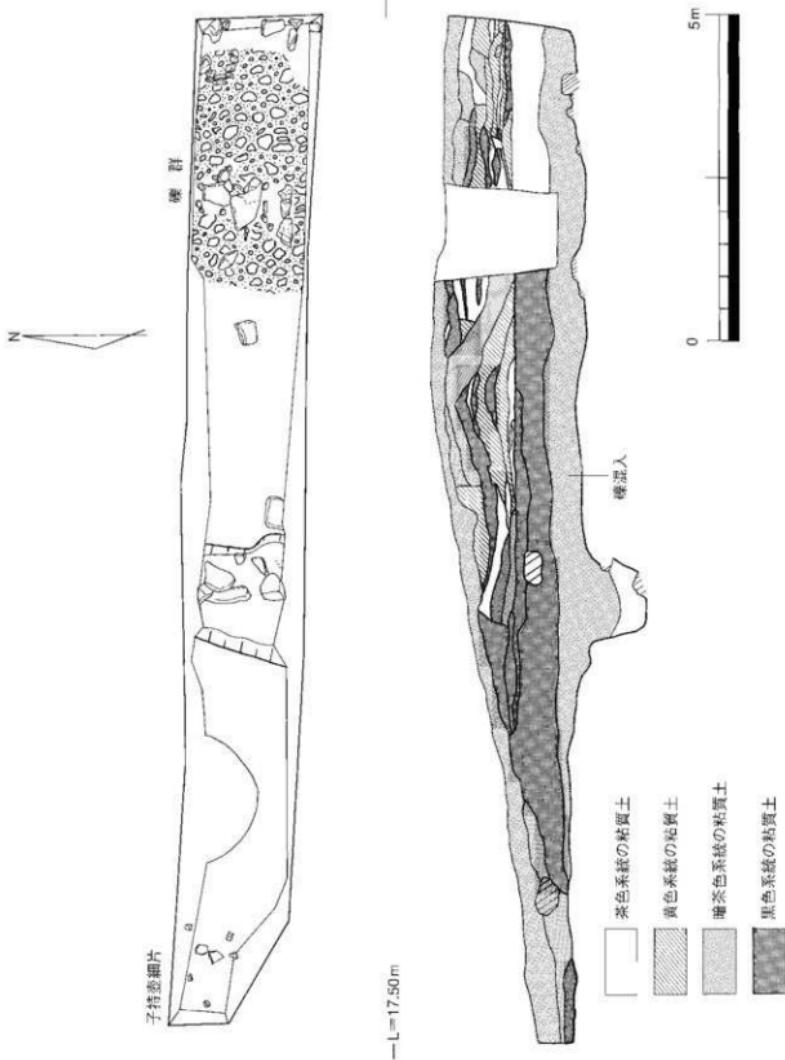
O トレンチ東側礫群検出状況



O トレンチ自然流路検出状況



O トレンチ西側子持壺細片出土状況



第29図 O トレンチ実測図

平成9年度出土遺物について

No.1、2は須恵器で子持壺の子壺、No.3は子持壺の脚部、No.4～6は弥生式土器の壺、No.7～14は土師器の壺、No.15は高坏である。

No.1は推定口径15.5cmを測る。底部に浅い孔があるが、貫通はしていない。No.2は推定口径9.6cmを測る。底部は穿孔してある。口縁、頸部、肩部、胴部が明確に区別できる。

No.3は推定底径20.6cmを測る。脚端部はやや端広がりで、内面に粘土の繋ぎ目が見られる。

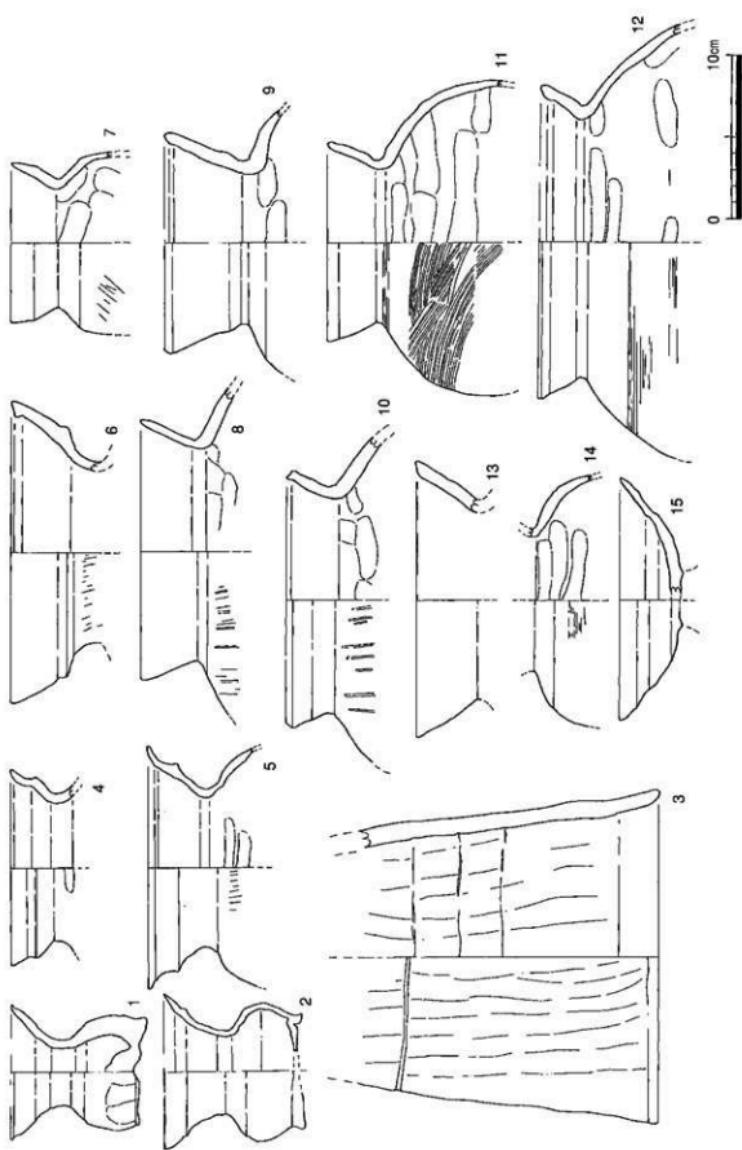
No.4は推定口径12.0cmを測る。口縁は外反しており、内外面ともヨコナデを施す。No.5は推定口径15.0cmを測る。口縁は外反し、口縁内外面はヨコナデ、肩部は外面ハケメ調整、内面はヘラケズリを施す。No.6は推定口径18.6cmを測る。口縁端部は内面に肥厚、口縁は外傾し、棱は鈍い。口縁内外面はヨコナデ、頸部外面は薄いハケメ調整、内面は摩滅している。

No.7は推定口径9.4cm、No.8は推定口径13.2cm、No.9は推定口径13.6cm、No.10は推定口径15.1cm、No.11は推定口径17.4cm、No.12は推定口径19.2cm、No.13は推定口径17.0cmをそれぞれ測る。口縁は外傾し、口縁内外面はヨコナデ、肩部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ及びヘラミガキを施す。No.14は肩部は丸みを帯びており、外面はハケメ調整、内面はヘラケズリを施している。

No.15は推定口径15.0cmを測る。口縁は大きく外傾し、坏部内面はやや内凹する。外面はヨコナデ及びヘラミガキ、内面はヨコナデ及びヘラケズリ、ヘラミガキを施す。



M・N・Oトレンチ出土遺物



第30図 向山2号墳M・N・Oトレンチ出土遺物実測図

第6表 平成9年度出土遺物一覧表

No.	種類	器種	法量(cm)	形態・文様・手法の特徴	出土地点
1	須恵器	子壺	推定口径 8.4	胴部と底部の区別が明瞭ではない。底部に浅い孔。口縁内外面は回転ナデ、胴部外面は回転ナデ及びナデ、内面はナデ。	Oトレンチ西側
2	須恵器	子壺	推定口径 9.6	口縁、胴部、底部の区別が明瞭。底部は穿孔してある。口縁内外面は回転ナデ、胴部外面は回転ナデ及びナデ、内面はナデ。	Oトレンチ東側 黄褐色粘質土
3	須恵器	子持壺	推定口径 20.6	脚端部はやや裾広がり、内面に粘土の繋ぎあり。内外面とも縱ナデ、脚端部はヨコナデ。	Oトレンチ西側
4	弥生式土器	壺	推定口径 12.0	口縁は外反する。内外面ともヨコナデ。	Nトレンチ 黒色粘質土
5	弥生式土器	壺	推定口径 15.8	口縁は外反し、鈍い稜を持つ。口縁内外面はヨコナデ、肩部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ。	Mトレンチ 黒色粘質土
6	弥生式上器	壺	推定口径 15.8	口縁端部は内側に肥厚、口縁は外傾し、鈍い稜を持つ。口縁内外面はヨコナデ、肩部外面はハケメ調整、内面は摩滅。	Mトレンチ 黒色粘質土
7	上師器	壺	推定口径 9.4	口縁はやや外傾する。口縁内外面はヨコナデ、肩部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ。	Mトレンチ 黒色粘質土
8	土師器	壺	推定口径 13.2	口縁は外傾する。口縁内外面はヨコナデ及びナデ、肩部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ及びヘラミガキ。	Nトレンチ 黒色粘質土
9	土師器	壺	推定口径 13.6	口縁は外傾し、器壁は厚い。口縁内外面はヨコナデ、肩部外面は摩滅、内面はヘラケズリ。	Oトレンチ 黒色粘質土
10	上師器	壺	推定口径 15.1	器壁は厚く、口縁内外面はヨコナデ、肩部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ	Mトレンチ 黒色粘質土
11	土師器	壺	推定口径 17.4	口縁端部は平坦で、口縁はやや外傾する。口縁内外面はヨコナデ、胴部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ。	Nトレンチ 黒色粘質土
12	土師器	壺	推定口径 19.2	口縁端部は内側に肥厚し、口縁は外傾する。口縁内外面はヨコナデ、胴部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ及びヘラミガキ。	Nトレンチ 黒色粘質土
13	土師器	壺	推定口径 17.0	口縁は外傾し、器壁は厚い。口縁内外面はヨコナデ。	Oトレンチ 黒色粘質土
14	土師器	壺		肩部は丸みを帯びている。肩部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ。	Mトレンチ 黒色粘質土
15	土師器	高杯		口縁は大きく外傾し、杯部内面は内凹する。外面はヨコナデ及びヘラミガキ、内面はヨコナデ、ヘラケズリ及びヘラミガキ。	Nトレンチ 黒色粘質土

その他の調査

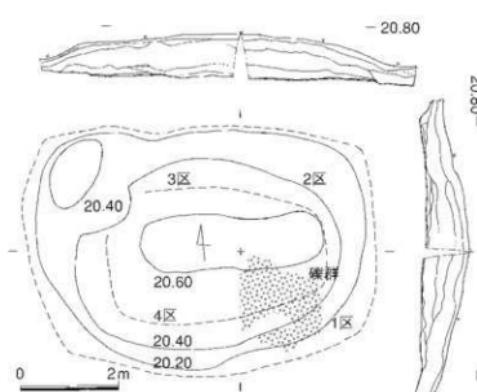
当初2号墳と考えていた隅丸長方形を呈するマウンド状の高まりを調査したところ、古墳ではなく中世後期以降に作られた遺構であることがわかった。盛土は東西7m、南北5mの範囲に長方形に施され、現存の高さは90cmである。調査前、1区の表土上には荒神さんの祠が祭られていて周辺にはかわらけや小さな埴利などが散乱していた。表土中からは4~20cm大の礫が一面に検出され、礫の上や間からかわらけの破片が見つかった。第2層以下盛土の基盤面に至るまで他の遺構は検出できなかったので、この盛土は表土中の礫やかわらけに関連したものではないかと考えられる。盛土中及び基盤面以下の土層から16世紀代の中国製青磁の小破片と白磁皿が出ている。



調査前（東から）



礫群



1区 完掘後



3区 完掘後

第31図 中世以降の盛土実測図



第32図 青磁・白磁実測図

IV. 小 結

1号墳については墳丘の上部は昭和45年の重機掘削により削り取られているが、東西約32m、南北20m以上の二段築成大型方墳の可能性があると考えられる。地形を考慮してか丘陵南向斜面の傾斜を生かした形で斜めにカットし、さらに石室の後方6m地点を逆L字状にカットしている。ここで青メノウが見つかっており、墳丘基盤上で祭祀を行った可能性があることを物語っている。なお、石室の掘り方については裏込め石の付近にあるものと思われる。石室の壁石を立てて裏込め石を置き、黒褐色系統の粘質土を埴石上端近くまで積んだ後天井石を乗せ、石の合わせ口を白色粘土で目張りをする。さらに暗茶～黒褐色土を天井石の所まで積み上げ、それより上部は黄褐色系統の土を土体にし、黒色土を間にはさみ、互層状に盛って築成している。

古墳の墳裾と思われる付近から相当量の子持壺の破片が密集して出土していることから、古墳築造時に円筒埴輪と同様の用途で古墳の周囲に巡らせたものと考えられる。

土体部については出雲地方独特の埋葬施設である石棺式石室を用いている。玄室、羨道、前庭からなり、南向きに開口する。玄室左壁に沿って石棺を組み込む。玄室、羨道とも各壁、床、天井は凝灰岩の一枚の切石で構成される。石室南側の上層堆積状況から埋葬を1あるいは2回しているものと思われる。2回目に石室内に進入した時に初葬時の副葬品（馬具・武器・玉・須恵器、いずれも細片）を掻き出し、玄門と羨門を右でおさえて閉塞しているが、この時の副葬品が出土していないことから、片付けをおこなったのみと考えられる。

前庭部において多数の須恵器が出土していることから、初葬時に前庭部において須恵器と木製の台又は容器を用いて祭祀を行ったものと推測され、羨道天井部両脇少し外側に子持壺を立てていたようである。

2号墳は盛土が一部確認されたが、後世の削平及び擾乱により墳丘の大半が失われており、盛土残存部上に後世2次堆積土がのっている。墳丘基盤や盛土状況は1号墳と同様に黑色粘質土層を基盤として黄色土を土体に黒色土を間にはさみ互層状に積んで墳丘を構築しているものと思われる。土体部は既に無くなっている。西側より子持壺の細片が密集して出土していることから子持壺を墳丘に置いた可能性も考えられる。

1号墳の築造時期については前庭部出土須恵器から6世紀末頃と考えられる。2号墳については西側より出土している子持壺から1号墳とほぼ同時期のものと思われる。

本古墳群は茶臼山麓に西日本最大級の前方後方墳である山代二子塚や大庭鶴塚、石棺式石室をもつ山代方墳、永久宅後古墳という島根県下でも大型の古墳が集まる「山代・大庭古墳群」が存在する。有力豪族の権勢を象徴するものであり、本古墳群も墳丘規模、埋葬施設、出土遺物からみても他の大型古墳に肩を並べるものである。残念なことに2号墳の残りが良くなかったため、1号墳と比較することができなかった。ただ、意宇平野周辺の古代墓制を考えていく上では貴重な資料になったことは間違いないであろう。

報告書抄録

ふりがな	むこうやまこふんぐんはくつちょうさほうこくしょ							
書名	向山古墳群発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松江市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第77集							
編著者名	金山正樹、瀬古諒子							
編集機関	松江市教育委員会、財團法人松江市教育文化振興事業団							
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL 0852(55)5294							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	所在地	コード	北	緯	東	経	調査期間	調査面積 (m ²)
			市町村	遺跡番号				
むこうやまこふんぐん 向山古墳群	しまねけんまつし 島根県松江市 こしばらちょう 占志原町	32201	F2				19940701～ 19940819～ 19950530～ 19960229 19970828～ 19971224	400 260 76
調査原因	平成6年度は個人住宅新築のため、平成7年度以降は石棺式石室を持つ古墳の形態を解明するため。							
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
向山古墳群	古墳	古墳時代	石棺式石室	子持壺 馬具・武器・玉 須恵器 土師器	<ul style="list-style-type: none"> ・出雲地方獨有の埋葬施設である石棺式石室。 ・古墳群部から出土している子持壺が円筒埴輪と同様の用途をもつのではないかと思われること。 ・1・2号墳は共に築造時期は出土遺物から6世紀末頃と推測する。 			

向山古墳群発掘調査報告書

1998年3月

発行 松江市教育委員会

印刷 松栄印刷室
松江市西川津町667-1